

---

だいたいチーバくんのおかげでややこしくなった話  
どっぐす

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だいたいチーバくんのおかげでややこしくなった話

### 【作者名】

どっぐす

### 【あらすじ】

非エロのBLです。

カップリングは進学校の秀才イケメン眼鏡と非進学校の野球部ピッチャー。

連作短編で、1話ずつ区切りのよい所で切れています。それぞれ読了時間は5く10分ほどだと思います。

なお作者は男（おそらくヘテロ？）なので、男性が読んでも問題はない仕上がりだと思います。保証はしませんけど。

【登場人物】

・総一郎

進学校に通う秀才イケメン。生徒会役員。

ソリッドショートの髪にスリム体型。眼鏡。

・隼人

非進学校通う野球部ピッチャー。定期テストはほぼ毎回赤点。

短髪で、鍛えているので細マッチョ。（ゴリマッチョではない設定です）

※本ページの扉絵は、この作品を読んで下さったイラストレーター  
のキルリアル様（@super\_killreal）よりご厚意  
で頂いたものです。

※2019／11／12追記

エブリスタ様の公式コンテスト『真夜中のラジオ文芸部×執筆応援  
キャンペーン 「スパダリ／溺愛／ハートフルなBLE」にて、本  
作が佳作に入賞しました。

だいたいチーバくんのおかげでややこしくなった話

隼人は最近、朝の電車で気になっている人がいる。

(よし、今日も乗ってきた)

視線の先は、開いたドアから入ってきた、スラリとした体型の学生である。

スマートに決まったソリッドショートの髪型。伸びた背筋。乗り込む際の足運びにも優雅さがある。

彼の名前は知らない。

ブレザーのエンブレムから、通える学区内では一番偏差値の高い高校の生徒であること。同じくブレザーの学年章から、自分と同じ高校二年生であること。そして生徒会の資料や議事録を持っていたことがあり、どうやら生徒会役員であること。その程度しかわかっていない。

隼人は始発駅の次の駅で乗るため、いつも席に座れてしまっている。だが、この駅まで来るとさすがにもう空席はない。

乗ってきた彼は、サツと車内を見渡すと……隼人の座っている席のすぐ前に来て、止まった。そしておもむろに吊り革をつかむ。

これは今日だけではない。一か月前——新年度が始まったときから、ほぼ毎日である。こちらが座っている席は毎回違うのに、必ず目の前に来るのだ。

最初は「たまたまか？」と思っていたが、さすがに一週間二週間と続くと不自然さを感じてきた。もしかして、こちらを意識している……のか？ と徐々に考えるようになり、今ではもう確信に変わっている。これだけ続けば偶然であるはずがないと思っていた。

電車が動き出すと、彼はきれいなスクールバッグから、授業ノートと思われるものを取り出し、読み始めた。

隼人のほうも、今日は中間テストの最終日であり、車内で少しでも勉強したほうがいい立場だ。とりあえず殴り書きのノートを出し、開いた。もちろん集中はできない。どうしても彼のほうを観察してしまう。

(しかし、ものすごいイケメンだよな、こいつ)

彼はノートをやや離して持っているので、顔がよく見える。おそらく、誰が見ても美顔と言うだろう。特に、シャープな眼鏡の奥の、鋭い切れ長の瞳。その威力は格別だ。同性である隼人もドキドキしてしまう。彼と視線が合いそうになるたびに慌てて逸らせ、不自然さがないように努めた。

そうしていると、彼は手に持っていたノートを仕舞い、次のノートを取り出した。

その瞬間。

彼のスクールバッグのポケットから、正方形でピンク色の何かが飛び出した。

四つ折りであったと思われるそれは、空中で崩れて広がり、隼人

の膝をかすめるようにして床に落ちた。

「――！」

それはハンドタオルだった。ピンク基調に水玉模様。しかも真ん中には、変わったポーズを取った、赤色のゆるいキャラクタが描かれている。

（このキャラって、チーバくん、だよな……？）

目の前に立つ彼の伶俐な印象に、あまりにも合わないものであった。

隼人は混乱したまま手を動かしてそれを拾い上げ、彼に差し出した。

「落ちたよ」

イレギュラーな展開で頭が整理できていないままだったので、落ちたことを明らかに認識済であろう彼に、さらに指摘の言葉をかけてしまった。そのおかしさに気づく余裕もなかった。

「すまない。ありがとう」

彼の薄い唇から、言葉が発せられた。初めて聞いた彼の声は、その顔同様に理知的な鋭さを感じさせるものだった。

眼鏡を中指で直してから、スッと伸ばされた彼の手。受け渡しの瞬間、手と手の距離は数センチほどまで接近した。いつも観察はし

ているが、あらためて間近で見るとその手は、絹のような白さとキメの細かさだった。野球部でピッチャーをやっている隼人のマメとタコだらけの手とは、まったく異なっていた。

受け取ったハンドタオルをバッグに戻す様子を目で追い、そのまま彼の表情を確認する。毎朝見てきたものと変わらない、冷静沈着な秀才のマスク。

（あ、これって。見とれてる場合じゃないのかな……？）

これはチャンスか。いや、あえて向こうがチャンスを作ってくれたのか？ 仲良くなるきっかけは落とし物から——そんな話も聞いたことがあるような気がする。印象とは正反対のご当地ゆるキャラグッズを落とし、わざと隙を作ること、こちらが話しかけやすい状況を作ってくれたのか？

そんなことを思った隼人は、相手のためにもここは何か話しかけないといけないと、自信のない頭を一生懸命回転させようとした。しかし、やはりうまい話しかけ方がなかなか思いつかない。

焦った。この機会を逃すと、次のチャンスがいつ来るかわからない。

「あのさ。いつも俺の前に立ってるよな？」

結局、他に球種が思いつかなかった隼人は、直球を放った……が。

「ああ。君はいつもこの次の駅で降りるから。そのあと空いた席に

僕が座れるからな」

隼人の頭に、ピッチャーライナーが直撃した。強い、衝撃。

(うあああ！　そういうことだったのかよ！！)

そしてそのあとは、今まで経験したことがないような恥じらいの熱を顔に感じた。実際に発火したのではないかと思うほどだった。

「あっ、そ、そうだよなっ。立ったままだと疲れるもんな。アハハハ」

慌てて作り笑いするのが精一杯だった。

最初から勘違いをしていたのだ。彼は別にこちらに興味があるわけではなかった。こちらと話したいなどという思いがあるわけでもなく、ただの席取り要員としてしか認識していなかったのだ。

(やべ、これスゲー恥ずかしいやつじゃねーか)

よく考えたら、こんないかにも秀才というオーラの人間が、自分のような運動バカを相手にするわけがなかったのかもしれない。自分、何を勘違いしていたのだろうー！。

がくりとうなだれ羞恥に駆られ続けていたら、あっという間に学校の最寄り駅についてしまった。

隼人は網棚の野球用バッグを取り、頑張った笑顔で彼に小さく会釈すると、逃げるように下車した。



駅の改札を出て、通学路をとぼとぼ歩いていく。  
惨めだった。

が、いつのまにか到着していた校門の前で、ふと思った。

(ん……？ いや、待てよ)

今のは、単に自分の勘違いが判明し、現状がわかっただけのこと  
で、別に何かがマイナスに振れたというわけではないのではないか？

逆に、事実がわかってよかったのかもしれない。自分が席取り要  
員ということは、また自分が座っていれば、彼は目の前に立ってく  
れるということでもある。ならばここから先、チャンスはいくらで  
もあるということではないだろうか？

(よしー)

落ちていた肩が、元どおりになった。

天を見上げる。みずみずしい、春の青空。

(仲良くなるために、これから頑張っていこう)

隼人は新たなスタートを誓い、校門をくぐるのだった。

なお、テストの結果は全教科赤点だった。

\* \* \*

総一郎は最近、朝の電車で気になっている人がいる。

(よし、今日もいるな)

視線の先は、同じ車両の席に座っている学ラン姿の学生である。高校二年生になったとき、総一郎の気まぐれで乗る車両を変えたことで、同じ車両の乗客同士となった。

彼の名前は知らない。

だが学生服が学ランの高校は、この地域に一つしか残っていない。よって、あまり偏差値の高くない某高校の生徒であることはすぐに特定できた。また、網棚に野球用バッグが載っており、たまにチャックの隙間からグローブが見えていることや、手にできているマメやタコから、どうやら野球部員だということもわかっている。

総一郎はいつものように、彼の座っている席のすぐ前に立った。もちろんこれは今日だけではない。毎日だ。

(しかし、いかにもスポーツマンという感じに見えるな、彼は)

一言で言えば「スリム」のくくりになってしまいう体型なのだが、一味違うのである。

学ランの上からでもわかる、がっしりとした肩。相当鍛えているのだろう。そして、座っていることで一段と際立っている太ももの筋肉。両隣で死んだように眠っているサラリーマンのそれとは、質がまったく異なる。

観察が不自然にならぬよう、総一郎は授業ノートをバッグから取り出した。もちろんその中身を読むつもりなど微塵もない。今日は中間テスト最終日だが、勉強は十二分に足りている。

総一郎は勉強するふりをしながら、観察を続けた。一ヶ月続けてきてもなお、彼を見ることは飽きない。

(さぞ学校では人気があるに違いない)

顔にも、体育系の爽やかさがある。動くのに邪魔にならなそうな自然な短髪、スラっとした鼻筋。眉毛も細眉で、よくある手入れに失敗したような不自然な感じではなく、ナチュラルな印象だ。もともと形がよいのだろう。しかも柔らかかそうだ。

そして、野球少年らしい純粋な光を放つ瞳。これが何よりも素晴らしい。視線がまともに合いそうになるとバツが悪そうに目を逸らす仕草も、何か心をくすぐられるものがある。

そんなことを考えながら、総一郎はカモフラージュのノートを別の教科のものに交換しようとした。

が……。

(——！)

スクールバッグのポケットから、愛用のハンドタオルが飛び出し、床に落ちてしまった。

それは所持品の中で、もっとも目の前の人物に見られたくないものであった。

生地がピンク色で水玉模様の、チーバくんのハンドタオル。明らかに、相手が描いているであろうこちらの像には合わないアイテムだ。

(しまった……)

無情にも広がりながら落ちたため、中央に特殊なポーズで描かれたチーバくんまでしっかり見られてしまった。この一ヶ月で彼に対し慎重に与えてきたイメージが……と焦る。

せめてもの初期対応ということで、顔に出ないよう表情筋に集中した総一郎。その眼前で、彼の手がサッと床に伸びた。拾ってくれたのだ。

チーバくんのハンドタオルを掴んだ彼の右手は、まもなくこちらに差し出されようとしている。手と同時に来るのは、あからさまな嘲笑か。それともドン引きな顔か。

構える総一郎だったが――。

「落ちたよ」

かけられた言葉は、そんな平凡なものだった。いや、言われなくてもわかっているぞ？ そう突っ込めるような言葉だ。

彼の表情も、いつものとおり朴訥そうで、かつ真面目なものだった。嘲笑の成分などまったくなかった。

あらためて、差し出された彼の右手を見た。

ハンドタオルが微妙に邪魔だ。ポジションはピッチャーで右投げだろうと推測するに至った指のメメや、バッティングのほうは左打ちなのだろうという推測に至った手のひらのタコは見えない。

が、その代わり、ほどよいゴツさのある指先と、深く切られた爪がいつもより間近で見えた。

手と手の距離がわずか数センチということに、気分が高揚する。

(いや、見とれている場合ではない……か?)

予定では、もう一、二週間ほど後になってから話しかけるタイミングをうかがうつもりだった。だがこの状況、チャンスととらえ、存分に利用すべきなのではないか？ 総一郎はそう思った。

礼を言ったあと、そこから話を広げてみてはどうだろうか。うまくいけば、今日にも「他人」から「他人以上友達未満」への昇格が果たせるかもしれない。そうなれば、今日という日は祝日化してもよいほどのめでたい日となる――。

「すまない。ありがとう」

まずは礼とともに、チーバくんのハンドタオルを受け取った。

やや無愛想な言い方になってしまったが、キャラ的にはまあまあ無難であろうという自己評価を下した。これ以上のキャラブレは避けたかったので、いちおう及第点とする。

よし。続いてこちらから何か言葉を――。

ところが。

総一郎よりも早く、相手のほうから想定外の言葉が飛んできてしまう。

「あのさ。いつも俺の前に立ってるよな？」

そのタイミング、その内容。心臓が大きく跳ねた。飛び出るかと思った。完全に意表を突かれた。

どう考えても、正直に答えられるはずがない問いかけだ。

激しい動揺。

そしてそれを表に出すまいという必死さは、新たなミスを生んだ。

「ああ。君はいつもこの次の駅で降りるから。そのあと空いた席に僕が座れるからな」

とっさに、そう取り繕ってしまったのである。

(まずい……)

言い終わるや否や、そう思った。

彼の前に立つ理由が、「空いた席に座りたいため」。とっさに思いついた取り繕いにしては、完成度が高すぎやしないだろうか？ しかも悪い方向に。

若い学生でも朝の電車で座りたい人はたくさんいるだろう。リアリティがあるので、彼が完全に信じてしまった可能性がある。それではいけない。「あ、そう」で完結してしまう。その先がない。

なぜこのような拡張性のない答えを選んだのだろうか。もっと話を広げやすい、たとえば本音があることを匂わせるような、そんな感じにはできなかったのだろうか？

また、人を『席確保要員』として扱っているような印象を与えてしまった可能性が濃厚であることも気がかりだ。

「僕のために席を取っておいてくれ」と言われて気分のない人間などいないだろう。イメージの大幅悪化を招いたのではないか。

さらには、実際には彼が下車したあと、自分は空いた席に座っていない。体調管理には気を遣っているので座る必要が特にないということもあるし、彼が温めた座席を使うことに少々気恥ずかしさもあったからだ。虚偽答弁にも当たってしまったている。

最悪だ。今後にもつながらず、こちらに対しての印象が悪化したであろうという事実と、嘘をついてしまったという後味の悪さが残ってしまった。

これはきつと、平成三十年史で振り返られてしまうレベルの愚答

――。

一人反省会を開いていると、彼の最寄り駅に着いたことを知らせるアナウンスが耳に入った。

ハッとして彼を見ると、こちらに向けて笑顔で小さく会釈をしてきた。そしてサツと野球用バッグを取り、下車していく。

総一郎は、それを目で追うことしかできなかった。

彼がいなくなっても、反省タイムは続く。

(そもそも、だ)

毎日彼の前に立っているのに、向こうからボールが飛んできた途端に慌てふためき、ミスを犯してしまうというのはどうなのだろう。トラブル対応集や想定問答集の一冊二冊くらいは作っておくべきだったのではないか。生徒会役員らしからぬ、お粗末なリスクマネジメントだったのではないか――。

後悔に沈んでいるうちに、総一郎も学校の最寄り駅についてしまった。

駅の改札を出て、通学路をとぼとぼ歩いていく。  
惨めだった。

が、いつのまにか到着していた校門の前で、ふと思った。



(ん……？ いや、待てよ)

一概に悪い結果だけとも言えないのではないか？

彼を席確保要員呼ばわりしたことは当然よいことなどではないが、それは自分が今後も彼の前に立ち続けるという宣言をしたことにもなる。そして彼はそれに対し、笑顔をもって答えた。内心がどうかはともかくとして、申請書に承認印を押してくれたということだ。

つまり、今回の失策によって不可逆的な関係解消となってしまったわけではない。明日以降も、堂々と彼の前に立つことはできるのである。

虚偽答弁の罪悪感についても、明日以降、彼が下車したあと実際に席に座ってしまえばいい。そうすれば『嘘から出たまこと』となる。やや恥ずかしさはあるが、座ってみたいという思いがなかったわけではない。

(なんだ。絶望することはなかったな。まだ失点は取り返せる)

落ちていた肩が、元どおりになった。

天を見上げる。みずみずしい、春の青空。

(もうテストなどどうでもよい)

明日また彼に会えるだろうから、テスト中の時間も使って頭の中の準備を整えておこうー。

総一郎は挽回を誓い、門をくぐるのだった。

なお、テストの結果は学年一位だった。

(『だいたいチーバくんのおかげでややこしくなった話』 終)

春の座席は甘いので、朝採り&生食がオススメできる話

いつもの駅で、彼がいつものように電車に乗ってきた。

彼はサッと視線をめぐらせた。そして座っている隼人と目が合うと、一度中指で眼鏡を直し、レンズをキラリと光らせる。

その秀才ビームを受けた瞬間、隼人の体の中で、ゾワっとする感覚が末端から頭へと駆け上がった。同時に、全身の筋肉がこわばる。

(なんか、緊張するんだよなあ)

一度言葉を交わした相手を無視するほうが不自然なので、あいさつするくらいは当然である。よって隼人は、初めて会話をした日の翌日より、自分からあいさつをするようにしていた。

……が、一週間がたつ今であっても、彼にあいさつする前は全身が硬直してしまうのである。

彼が、隼人の前にやってきた。

初めて会話をした日の翌日以降、彼はなぜか毎日、厚めの冊子を右手に持っていた。表紙の厚紙のカラーはいつも違っており、今日は緑色だ。

「お、おはよう」

「……おはよう」

彼は隼人のあいさつを返すと、バッグを左手に持ちっぱなしには

せず、網棚の上の、隼人の野球バッグの隣に置いた。

あいさつのときの笑顔は自然に。噛まないように。顔を赤くしないように。

隼人は頑張っているつもりなのだが、ことごとく達成できていなかった。それでも、鋭い表情ながら彼があいさつを返してくれることに、内心で胸をなでおろすのだった。

初めて彼にあいさつしたときは、それだけで満足した……いや、それだけで満足すべきなのだろうと思おうとした。

毎日前に立ってくる理由——こちらが降りたあと、空いている席に座るため——を知ってしまったので、あまりグイグイ押しすぎると引かれてしまうだろうと考えていたためである。

（でもなー。初めて話した次の日から、なんかこいつの立つ位置が近くなったような気がするんだよね）

もしかして、こちらが話しかけやすいように近寄ってくれているのか？

隼人は期待半分にそう思ってしまう。

（しかも今日は特にヤバいな）

彼との距離が、今日はいつにも増して近いのだ。

そのよく締まっている腹部は、すぐ目の前。シワのないブレザーのきれいな生地と、ボタンがよく見える。

下のほうに目を向けると、両足は完全に揃ってはおらず、左足が

ほんの少し前に出ている。彼の左膝は、こちらの両膝を少し割って入っているようにすら見えた。

なるべく近いほうがうれいはずなのだが、いざ近すぎるとドキドキすぎて体がカチコチになってしまふ。光に寄せられるのに、いざ明るいところに出ると動きが止まる夜行性の虫のようである。

(俺、落ち着け……)

隼人が心を落ち着かせるために、鼻から大きく息を吸い、目をつぶった瞬間。

(——！)

電車が揺れ、彼の左膝が、隼人の膝や太ももの内側を撫でるように擦った。

膝が触れた瞬間の危険なくすぐったさ。ちょうど目をつぶったタイミングだったので不意打ちすぎて、あやうく声が出るところだった。

(あ、あぶねえ)

肝を冷やした隼人。変な声が出たりしようものなら一発アウトだ。二度と彼の前には座ることができないだろう。

またまた内心で胸をなでおろす。

(あ、それよりもだ)

隼人はすぐに頭を切り替えた。

大切なのは目の前の現実である。

この状況、今考えるべきことは――。

（ここまで距離が近くなったことは今までないし、せっかくだから、あいさつ以外にも何か話しかけたい）

彼は目の前に立つ理由を明かしているわけだが、それは「そういうことだから、話しかけるなよ」という意味まではないと思っていた。

むしろ、言いづらそうな理由を正直に話してくれて、その後も前に立ってくれて、あいさつまで返してくれているということを考えれば、ここで話しかけても迷惑とまでは思われないのではないだろうか？

そう考えた隼人は、このチャンスを生かす道へと進むことにした。  
が……。

（でも何話せばいいんだ？）

彼とは、通っている学校の偏差値が違いすぎる。偏差値が二十違うと話が合いにくいとかいう怖い話をどこかで聞いたことがあった隼人は、話題の選択に悩んだ。

（困ったなあ……向こうのレベルに合わせるなんて、俺無理だし）

うーん、と悩んで髪を搔いて上を向いてしまった……ら、彼ともにも目が合ってしまった。慌てて下げる。

そして下げた視線の先にあったのは、彼の右手にある、謎の冊子。

（お。会話のきっかけはこれがいいか？）

このチャンスを逃すのはもったいない。隼人は思い切ってもう一度顔をあげ、冊子を指さして、言ってみた。

「それ、何？」

「ああ、これはな——っ!？」

「えっ!？」

彼は冊子に目をやったのち、突然何かに驚いたように目を見開いた。

その反応に意表を突かれ、隼人も驚いてしまった。

お互いが、イレギュラーな顔で見合ってしまう。

（あれ？ そんなに意外な質問だったのか？ やべ、どうしよ……）

焦った隼人がごくりと唾を飲み込み、のどが動く。首に薄くにじんだ冷や汗のせいで、学ランのカラー部分が滑らず、皮膚を攣った。

「……これは、今日提出する予定のレポートだ」

あたふたしたままの隼人とは対照的に、一足早くいつもの理知的で沈着冷静な表情に戻っていた彼。眼鏡を一度直し、そう答えた。

(よかった)

彼の声の調子から、どうやら質問内容で怒らせてしまった可能性はないようだ。隼人は安堵した。

「そ、そっか。頭いい学校ってそういうの大変そうだな。アハハハ」

ホッとすると、今度はあいさつ以外での二度目の会話という気恥ずかしさが隠しきれなくなった。隼人は、また照れ笑いしながら頭を掻いてしまった。

もうちょっと話が広がればーと隼人はさらなる展開も期待していたが、彼はここで視線を外してきた。隼人の後ろの窓から、遠くを見ているようだった。

そして、そのまま黙り込んでしまった。目もつぶっている。

(あれ？　もしかして。毎日一生懸命レポートやって眠かったのか？)

ひもで綴じられた手作り冊子は、ここ一週間ほどいつも手に持っていたが、表紙の色が毎回違っていった。なので、毎日一冊提出をしていた可能性がある。

もしそうであれば、相当疲労が溜まっているのではないだろうか。質問直後に突然驚いていたのは、眠すぎて何か幻覚か幻聴でも発生したためか。



(やっぱり俺、空気読めてなかったかな)

まだ時期が早すぎた。あいさつ以外で話しかけるのは、彼のレポート提出が一段落ついでからのほうがよかったかもしれない。

隼人がそう反省していたら、いつも降りる駅に着いてしまった。

「じゃあな。大変だろうけど頑張れよ」

隼人はもう一度笑顔で、彼の目を見て、あいさつをした。すると。

閉じられていた彼の目が、スッと開いた。

「……ああ。ありがとう」

彼もこちらを見て、少し笑った。

その笑顔は今までの伶俐百パーセントなものとは違っており、隼人はドキッとした。

駅の改札を出ると、隼人は歩きながら思う。

(眠気を我慢してこっちに付き合ってくれてたんだなあ。さすが生徒会。優しいな……あ)

なるほど、と隼人は思った。

彼の最後の笑顔は、優しかったのだ。理知的は理知的なのだが、いつもより柔らかく、何かを慈しむような、そんな要素もある笑顔だった。

（あの顔は反則だな）

あれはまさしくー！。

（天使……！）

だが隼人は、彼からありがたく頂戴した幸福感を、すぐにしまい込んだ。

（あいつの気持ちに甘えちゃダメだ）

俺ももうちょっと相手を気遣えるようにならないとな、と気持ちを入れ直したところで、校門に到着した。

隼人は、空を見上げた。

（この前あいつのハンドタオル見たからかな？　なんか雲がチーバくんの形に見える。やべえ）

苦笑いしながら一つ伸びをすると、校門をくぐった。

\* \* \*

この日はなぜか、いつも乗る電車が非常に混んでいた。いつもどおり彼の前に立った総一郎だったが、背後の乗客に押し込まれ、彼との距離がいつにも増して近くなった。前に倒れて彼に覆い被さらないよう、左足をわずかに前に出した。

途中、電車が大きく揺れた。

左膝が、彼の鍛えられた太ももの内側をかすめる。

(――!?)

感じ取った弾力は、想像以上のものであった。

やはり野球部、しかもピッチャーの下半身は一味違う。あやうく声が出るところだった。顔が熱くなる。

(まさか鼻血が出たりしないだろうな……)

この近さを生かして彼に話しかけたい衝動にも駆られたが、鼻血が心配すぎた。

この距離で出血すると彼の学ランを汚してしまう。そうになったら一発アウトだ。彼の前に立つ資格を未来永劫失うだろう。

まずは鼻粘膜に意識を集中し、出血がないように祈った。

そして、どうやら大丈夫そうだと思ったところで――。

「それ、何？」

先に彼のほうから、質問が投げかけられた。彼の指先は、総一郎が手に持っていた三百ページ以上に及ぶ想定問答集へと向いている。

総一郎の体は、「待ってました」とばかりに武者震いを起こした。

この想定問答集、初めて彼と会話を交わした日に、人生初の徹夜をして仕上げたものである。これさえあれば、彼からどんな質問が飛んできて慌てずに対応できる。

総一郎は絶対の自信を持っていた。実際、想定問答集の中には今の状況を想定した質問もあったはずである。

だが、しかし。

「ああ、これはな——っ!？」

満を持して回答しようとしたのだが、思わぬ事態が発生した。

(冊子が開けない……だと……?)

総一郎は一転、絶望の淵へと突き落とされることになった。

そう。せっかく用意した想定問答集が、車内の混雑により開けないのである。

今日はいつもよりも車内が混んでおり、前や左右のスペースに遊びがなさすぎる。このままでは、腕を動かして冊子を開くことは不可能。

とはいえ、肘を張って隣の人を押しつけて冊子を開くのも、後ろを人を無理に押しやって冊子を開くのも、前に腕を伸ばして彼の頭上で冊子を開くのもだめだ。マナー違反であるし無礼すぎる。

そんなことをして、ただでさえ怪しい彼からの評価が下がってしまっただけで元も子もない。

(模範解答の内容を覚えておくべきだった)

冊子を手を持つ前提でいたため、内容の暗記の時間までは取っていなかった。書いたときの記憶をたどろうにも、人生初の徹夜で朦朧とした状態で作成したので、何を書いていたのかまでは思い出せない。

これは完全な誤算だった。

総一郎としては、「ああ、これはな……」と言って自然体で冊子を開き、該当のページを確認して答えるつもりだった。その構想がもろくも崩壊した。

(まずい)

総一郎は想定外の事態に混乱した。

だが、彼の目が驚きで見開かれたことを確認すると、すぐに体中を落ちつけにかかった。

(顔に出してはだめだ……せっかく質問してくれた彼を不安にさせてしまう。ここは平静を装わなければならない)

質問へのよい返しをひねり出す必要があるが、なかなか思いつかない。

これもタイミングが遅れすぎると彼を不安にさせてしまう。急いで考えなければならない。

押し寄せる焦りの波。

それは次なるミスを生んだ。

「これは……今日提出する予定のレポートだ」

総一郎は言い終わる前に失策に気づいた。

(しまった……)

高校の授業で、こんなに分厚くなるレポートの課題が出されるはずがない。比較的長いレポート課題が出る世界史でも、ここまでの文量を求められたことはない。

これは……彼に信じてはもらえまい。

追及されたらどうする？　どうかわす？

訴追の恐れがありますので回答は控えさせていただきます？　記憶にございません？　極めて遺憾であります？　緊急謝罪会見？　体調不良により入院？　いや、どの手もまずい。説明責任を果たしたことはない。社会的信用の失墜は不可避。

総一郎は頭が真っ白になりかけた。

だが――。

「そ、そっか。頭いい学校ってそういうの大変そうだな。アハハハ」

なんと、彼はそう返してくれたのである。

(助けてくれた)

そうに違いないと思った。

客がフィンガーボウルの水を勘違いして飲めば、皆それに付き合っ  
てフィンガーボウルの水を飲む。客に恥をかかせないようにする  
ためだ。

それと同じで、彼はすべてわかったうえで、こちらの至らぬレベ  
ルに合わせてくれたのではないか。

あらためて、彼を見た。

彼は頭を掻いている。整髪料を使っているさそうなサラサラの短  
髪、その毛先が慈愛に満ちた弾みを見せる。照れくさそうなその笑  
顔は、まぶしくもあり、穏やかでもあり、柔らかくもあり、そして  
何よりも優しかった。

これはまさしくー。

(天使……！)

だが総一郎は、彼からありがたく頂戴した幸福感を、すぐにしま  
い込んだ。

(彼の気持ちに甘えてはだめだ)

今回の失敗は軽いものではない。人間である以上ヒューマンエラーはゼロにはできないが、何度も繰り返さぬよう反省と対策は必要だ。おもとの原因は、電車は混むことがあるという当然の事象を織り込めなかったことにある。生徒会役員としては非常にお粗末なリスクマネジメントだった。

解決するには……。

(やはり、すべての想定問答を記憶するしかない)

それしかない。そもそも、想定問答集を手に持って乗車すること自体に甘さがあったのだ。三百ページ？ そんなものは自分にとってはたいした障害ではない。五百ページだろうが、千ページだろうが、全部覚えてしまえばいい。

すべてを記憶し、自在に引き出せるようにする。それこそが、究極の自己完結型ペーパーレス社会……！

結論が出たところで、彼の下車駅に着いた。

「じゃあな。大変だろうけど頑張れよ」

「……ああ。ありがとう」

ふたたび見た天使の笑顔に、総一郎の顔も自然とゆるんだ。



(さて、と)

彼は下車したが、今日はこのあとにやるべき大事なことがある。目の前には、彼が座っていた席。いや、彼に温められた席。いま彼は席を立てて下車したため、空席となっている。

実は、初めて会話をした日から一週間経った今まで、彼が温められた席には座れていなかった。いずれの日も、隣やそのまた隣に高齢者が立っており、自分が座るわけにはいかなかったためである。

だが、今日の両隣は二十代とおぼしき男性サラリーマン。近くにも高齢者の姿はない。

(今日こそは、ここに……！ 座れる……！)

湧きあがってくる感情としては、恥ずかしさもあるが、やはり嬉しさが大きい。

(今は五月……。春キャベツはみずみずしく、かつ柔らかく、そして甘く、生食には最適だという。じっくりと味わおうではないか)

総一郎ののどが、ごくりと上下した。

(産地直売、朝採り春キャベツ。謹んでごちそうになりまー)

ドン！

「――!?!?」

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

目の前には、ふさがってしまった席。

その無慈悲な現実を目の当たりにしてもなお、状況を理解するまで数秒を要した。

なかなか総一郎が座ろうとしなかったので、右隣に立っていた若いサラリーマンが大丈夫だと判断して座ってしまったのである。

（こ、こんなことが……）

力を失った手から、想定問答集の冊子が離れた。落ち際に指が紐に引っ掛かって解けたが、総一郎はそれにも気づかなかった。

（僕の……僕の朝採り春キャベツが……）

冊子はそのまま落下を続けて満員の通勤電車の床に落ち、ページがぶちまけられた。

なお、次の日は普通に座れた。

（『春の座席は甘いので、朝採り&生食がオススメできる話』 終）



きれいに巻いているつむじを見ると親指でグリグリやりたくなる話

彼から飛んでくる質問には、ここ数日は大きなポカもなく対応できていた。もちろん、頭の中に叩き込んだ想定問答集のおかげである。

順調――。

話が弾むレベルにまでは至っていないものの、確実に彼との仲は前進していた。

だがしかし。一つ取りこぼしたままのものがあった。

そう。目の前の座席に座る野球少年の名前を、総一郎はいまだ知らないのである。

本当はもっと前に聞くべきだったのかもしれないが、タイミングを逃してしまって、そのままだったのだ。

「君」という代名詞で呼ぶのも嫌いではないし、それに応えて見上げてくれる彼のまぶしい顔を見るのも悪くない。だが、このあたりで名前をきちんと聞いておかなければ、後の世の災いとなるのは火を見るよりも明らか。総一郎はそう考えていた。

今日……。列車はこれまでにない混雑ぶりだった。

そのおかげで、彼との距離は非常に近い。

下を見るとそこは、きれいに巻いている彼のつむじ。そして立体感のある両肩。三角筋の後部までしっかりと鍛えられていることを

想像するのは容易だ。

近すぎて、肝心の顔は彼が上を向いてくれないと見えませんが、それはそれでよい。耳が近いため、あまり大きな声を出す必要がない楽な距離、という解釈もできる。

さらに。列車の窓の外。朝に降っていた雨は止み、今はちょうど雲の隙間から、梅雨としては貴重な陽の光が差し込んできた。同時に輝き出す、彼のサラサラな短髪。

こんなに彼の名前を知るにふさわしいタイミングはあるだろうか？  
聞くのは恥ずかしいが、聞くは一時の恥。いつ聞くか？ 今でしょ！

総一郎は密かに決意を固めた。

(よし)

人に名前を聞くときは、自分が先に名乗るのがマナー。まずは自身の名を伝えることにした。

総一郎は左手で吊り革をつかんだまま、少しだけ彼の左耳に顔を近づけた。

「そういえば名前をまだ言っていないなかったな。僕の名は総一郎。君は？」

言えた。

総一郎は満足しながら、少し顔を離した。

これで彼の名前も教えてもらえるだろう。明日からはお互いに名前呼び。心の距離はまた一段と近づく。

期待に胸を膨らませたが――。

(……ん?)

彼が見上げてこない。

(どういうことだろう?)

しばらく待つが、やはり彼の首の角度は変わらない。

当然、彼が名乗ってくることもない。

(まさかの名乗り拒否か?)

だが、今日も朝の挨拶はお互いにしていたし、特に邪険にされたわけではない。名前を聞かれただけで機嫌を損ねるといいうのも考えづらい。

総一郎は混乱した……

……が、すぐに気づいた。

彼の首が、微妙に揺れていたことに。

距離が近すぎてよく見えなかった彼の顔を、頑張って覗き込む。目がつぶられていた。耳に感覚を集中すると、寝息まで立っていた。

(ね、寝ていたのか……)

どうやら、彼は完全に眠りに落ちていたようである。

そこで、電車が揺れた。

彼の頭部が揺れに合わせ、後ろへ。

無防備な寝顔が見えドキッとしたが。そのまま彼の頭は後方へ行き、後頭部が軽く後ろの窓に当たった。

彼の目が開く。

(あ、起きたな)

目が合うと彼は恥ずかしそうな笑みを浮かべ、すぐに伏し目となった。

(彼が寝ているのは初めて見たぞ……)

疲れているのであれば、今日はこれ以上余計なことはせず、そっ  
としておいてあげたほうがよいのだろうか？

総一郎がそう思ったとき――。

「俺の名前は隼人。ハヤブサにヒトって書いて隼人」

「ええあっ!？」

あまりの唐突さに、総一郎の奇声が響く。

そして彼も、「へえっ!？」という変な声とともに、総一郎を見上げた。

周囲の乗客が一斉に奇声二人組を見たが、総一郎には恥ずかしい

と思う余裕すらなかった。

（なんだ？ 何が起きた？）

彼は確かに寝ていた。あれが演技なら日本アカデミー賞は受賞確実。海外進出も夢ではない。それに、寝たふりなのであれば、いま彼まで驚いている理由が説明できない。そもそも彼には演技する必要性がないはずだ。

いったいどうなっているのか。総一郎は混乱した……  
……が、すぐに一つの推論を立てた。

（ああ、なるほど。彼は夢を見ていたのではないか？）

彼は確かに眠りに落ちていたが、彼自身はそれに気づいていなかったのではないか。

そして、彼は夢を見ていた。その夢の中には自分が出演しており、こちらの名乗りの声が届いていたのだろう。現実の声や音がリアルタイムで夢に出てくるということはよくあるらしい。きっとそうに違いない。

総一郎はそう考えた。

（僕の声は彼の夢の世界にまで届くー。大いに結構ではないか）

ニヤつきそうにもなったが、そこは一生懸命に抑える。

（しかし……隼人か。いい名前だな）



先ほどの彼の名乗りを、脳内でもう一度振り返った。少しだけ恥ずかしそうな彼の声とともに再生された、その名前。総一郎は、彼が下車するまでリピートして楽しんだ。

\* \* \*

(やべ、寝ちまってた……)

いつものように電車の座席に座っていた隼人は、いつのまにか意識が飛んでいたことに気づいた。

目を開けたら、前に立っていた総一郎とまともに見つめ合った状態だった。

恥ずかしくなり、目を伏せてしまう。

(今日はこいつの名前を聞く日って決めてたんだ。寝てる場合じゃねえのにな)

先日の追試は全滅し、今日は追試の追試を受ける。とても重要な日だ。

部活の関係で勉強する時間が夜しかなく、極度の睡眠不足。なので眠い。眠すぎる。

だが、今日は決戦の日。眠気に負けているようではダメだ。やは

りここは彼の名前を聞いて、気持ちよく戦いに赴きたい。隼人はそう考えていた。

（おー）

電車に乗ったときは雨が降っており、空も黒く、電車の中も暗くて陰鬱な雰囲気だった。しかし寝落ちしている間にやんだのか、少し車内が明るくなっていった気がした。

（いい感じだな）

後ろの窓からも、ちょうどよい加減の光が入ってきているのだから。目の前に立つ彼の整った顔は、一段と際立っていた。

そして混んでいるおかげで、彼との距離は限りなく近い。柔軟剤のいい匂いがするくらい近い。

ひるむ気持ちはあった。やはり恥ずかしいからだ。

でも、こんなに彼の名前を聞くにふさわしいタイミングはあるだろうか？

聞くのは恥ずかしいが、こんな絶好のチャンスを機会を逃す手はない。いつ聞くか？ 今でしょ！

気持ちは固まり、隼人は突撃することにした。

（えーっと。名前を聞きたいなら、まずは自分から名乗るんだっけ？）

しっかりと見上げ、彼の顔を見る。

「俺の名前は隼人。ハヤブサにヒトって書いて隼人」

「ええあっ!?!」

「へえっ!?!」

普通に名乗っただけなのに、なぜか凄まじかった彼の驚きぶり。隼人の口からも、変な声が出てしまった。

(なんだ? 何が起きたんだ?)

眼鏡の奥に見える彼の目は見開き、口も半開きのままで固まっている。

(俺の名前、そんなに変だったか? 別に普通だよな?)

周囲のサラリーマンが一斉に奇声二人組を見ていたが、隼人には恥ずかしいと思う余裕すらなかった。

焦りと混乱のまま、時が流れる。

だが彼のほうは、なぜかすぐに落ち着きを取り戻したようだった。彼が顔に浮かべたのは微笑……いや、ニヤリとしている感じだろうか?

隼人はその意味がわからず、二段ブーストで混乱した。

そしてそのまま、いつも隼人が降りる駅に到着してしまった。

「ま、ま、ま、ままたな」

「ああ、また」

わけがわからない隼人が噛みまくりの挨拶をして立ち上がるうとすると、彼からはいつもどおりのあいさつが返ってきた。しかもまぶしい笑顔付きである。

混乱したまま出口に向かおうとしたが、そこで重大なことに気づいた。

（あっ。あいつの名前、まだ聞いてないー）

無情にも、サラリーマンの波は隼人の鍛え抜かれた体を飲み込んでいく。

列車の外へ、そして改札口の外へと押し流されてしまった。

頭が真っ白のまま、通学路を歩き続けた。

校門の前に着くと一度立ちどまり、空を見上げる。

雨は降っていないものの、空はふたたび薄灰色の雲でびっしりと覆われていた。

（え、俺こんな気分のまま追試の追試受けんの？ マジ？）

がっくりと、一つため息をつく。

が、やはり隼人は野球部員、スポーツマンである。すぐに頭のリセットを図った。

（気持ち切り替えないとな。今回も点が取れなくてまた引き延ばさ

れちまうと、睡眠不足で部活にも集中できなくなるし。それに、朝の電車であいつの前で寝ちまうのって、すげーもったいないよな)

気合いを入れるために、頬を自分で一回、張る。

(ほらほら。空も空気読んで太陽出せって)

見上げて空にも喝を入れると、すぐに雲のところどころに割れ目  
ができた。

地上へと降り注ぐ薄明光線――天使のはしごーが出現する。

(よーし頑張るぞ)

隼人は息を大きく吸って、校門をくぐった。

なお、結果は全滅した。

(『きれいに巻いているつむじを見ると親指でグリグリやりたくなる話』 終)

※注 誤解は翌日解消され、隼人も無事に総一郎の名前を知ることができました。

忘却はよりよき前進を生むが、それを言ったのがニーチェなのかフルーチェなのかはわからない話

いつものように朝の電車に乗った総一郎は、いつものように隼人が座っている席の前に向かう。

（ん？ 今日是最初からか。月曜日なのに）

電車の窓に完全に預けるかたちになっている隼人の頭。ずいぶんとわかりやすく寝ている。

彼は先週の後半から毎日途中で寝落ちしており、下車駅に着いたら総一郎が起こしていた。が、最初から寝ているパターンは初めてだ。

総一郎はポジションに入ってつり革を掴むと、観察モードに入った。

（この寝方だと顔が見えるのがいいな）

彼の無防備な寝顔が嫌いではない総一郎の表情は、自然と緩む。このまま彼の下車駅まで鑑賞しているのも悪くない。そう思っていた。

しかしこの寝方、電車が強く揺れると頭が窓ガラスでバウンドする。ずっとそのままというわけにはいかなかったようだ。

「……………ん……………どわっ！！」

目が開き、驚く彼。

「起きたのか。おはよう。隼人君」

「お、おはよう総一郎……。悪い、寝てた」

まだ若干の気恥ずかしさはあるが、お互い名前を呼んであいさつをする。

「疲れているのならそのまま寝ているといい」

「いやー、できれば寝てたら起こしてほしいというか。いろいろもったいないし」

「ん？」

「あ、なんでもない。こっちの話」

彼が笑いながら頭をかく。

暑い季節になってきても、その短髪はサラサラしている。

「朝から眠いというのは、野球の練習の影響なのか？」

「あー、言ってなかったっけ？ 追試の勉強のせい」

「初耳だぞ。しかも時期が変だな。なんのテストの追試だろう」

「中間テスト」

「中間って、一か月くらい前の話じゃないか」

「ああ、いま追試の追試でさ。あ、違った。追試の追試の追試だった」

（――!?!?）

追試の追試の追試。総一郎にはその意味がすぐにわからなかった。いや、言葉の意味はわかるが、いったいどういう状況なのかがピンとこなかった。

続いて聞きただすようなかたちとなる。

「赤点の基準が厳しいのか？ 君の学校の『赤点』は何点未満なんだ？」

「んーっと。30点取れないと赤になる」

30点未満が赤点。それは、総一郎の学校と同じ基準だった。

「聞いていいのかわからないが、どの教科が赤点になり続けているのかな」

「恥ずかしいけど、全部！ 数学Ⅱとか本番0点だった」

困惑に拍車がかかる。

(……!?!? 何をどうやったらそんな事態になる?)

総一郎は、赤点はおろか、定期テストでも模試でも90点未満を一度も取ったことがない。30点未満という点数をどうやったら取れるのかわからなかった。0点に至っては名前の書き忘れ以外にはありえないとすら思った。

だがその総一郎の混乱は、視線のピントが再度隼人に合うと同時に消し飛んだ。

彼の頬がやや赤く染まっていたためである。



（ああ、だめだ。これで困惑するのは彼に失礼だ）

総一郎は頭の中をニュートラルに戻した。

目の前の彼は、本当に恥ずかしそうに言っているように見える。彼はこちらの問いに対し、ごまかすことだってできた。なのに彼はそうしなかった。

弱みを晒し、自身でも恥ずかしいと感じていたことを言ってくれた――それは信頼の証でもある。

（今突きつけられている状況。これはきっと天が授けた試験に違いない）

彼は信頼の証を見せてくれた。

そして今、自分はそれに対する返し方を試されている状況だったのだ。

言うなれば天からの一学期中間試験。ここで赤点を取っているようでは二人の仲に未来はない。

（危なかった）

総一郎は、意識的にぐっと顔を引き締めた。

彼の信頼を裏切ることがあってはならない。ここは正確かつスピーディなフォローで応えるべきだ。

「隼人君。この前ネットで見たデータによれば、高校野球部の週当たりの平均活動日数は6・6日。これは全種目の中で最高の数字だ。

そして平日一日あたりの平均活動時間は3・4時間で、やはり最高。休日一日あたりの平均活動時間に至っては7・7時間で、二位のバレーボール部4・9時間を大きく引き離し断トツの一位。君の学校も例外ではないのだろうか？」

ニュースサイトや新聞の閲覧で築きあげてきた頭の中のデータベースを高速検索し、具体的な数値を出した。

野球部はとにかく勉強に充てられる時間がない。それが他の部活との差であり、ディスプレイアドバンテージなのだ。

「そんな数字よく知ってるなー。ま、うちも多分例外じゃないけど」  
「そうか。ならば学業が犠牲になるのは仕方のない部分もある。赤点は断じて恥ずかしいものではない」

（よし。フォローは完璧だ。『合格点』は取れただろう）

内心でニンマリした総一郎だったが、そこでこの話は終了とはならなかった。

隼人はさらに返してきた。

「でも、できるやつもいるからなあ。俺、頭悪くってさ。困っちゃうよな」

「……」

困っちゃう。

アハハと照れ笑いする彼を前に、その彼の言葉が総一郎の中で残響する。

(これはSOSサインか)

彼は勉強ができなくて困っていると知っている。

そう。困っているのだ。

相手が困っていれば……。

(助けるのがパートナーというものだろうな)

幸いにも、自分は入学以来、学年一番をキープし続けている。自分で言うのは気がひけるが、勉強ができると言っておそらく間違いはない。ここで彼を救う役は、自分が最適……

……いや、自分以外にありえないのではないか？ 総一郎はそう思った。

学校が違うので教室で教えることは不可能だが、都合のよいことに、自分の家は彼の通学経路上にある。部活の帰りに途中下車で家に寄ってもらい、自室で勉強を教えることが可能だ。

先日名前も交換し、挨拶および通常の会話は毎日交わしている。もう知り合いと……いや、友人と言ってよい関係。自宅に呼んでも問題はなはず。

(よく考えたら、『合格点』などで満足してはダメだったな)

実際に取れるかどうかはまた別として、『百点』を目指すべきだった。十割を目指して初めて九割の得点が取れる。今のようなききは話を聞くだけでなく、ソリューションまで提供しなければ百点を

目指す姿勢としては疑問符がつく。

ここでもう一步踏み込むべきだー。

俄然やる気が出た総一郎は、瞬時に口説き文句を作成した。

「隼人君。君の頭が悪いなどという事実はないと思う。だが現状のままではいいのかと言われると、やはりよくはないのだろう。その調子ではまた追試に落ちる可能性は高いだろうし、来月に始まる期末テストも赤点になるだろう。そこでも赤点ならまた追試地獄だ。いつまでたっても解放されず、寝不足が続く。そうなれば野球の練習にも影響が出てくるだろうし、早急な対策が必要かもしれない」

まずは、彼に申し訳ないと思いつつも不安を煽った。

悪い商売でもよく使われるやり方だと聞いていたが、よく使われるということは、効果的だということに他ならない。自身の提供するソリューションで彼を救うという目的がはっきりしている今、使わない手はない。

「そ、そっか。お前の言うとおりだろうな。あんまり考えたくないんで考えないようにしてたけど。やっぱり不安だよ」

「なるほど。では君に提案がある。僕が君に勉強のやり方を教えるというのはどうだろうか？」

そして次は、『ここだけのいい話』に聞こえるような提案をおこなう。これも商売でよく使われる方法だとされている。

「えっ、お前が俺を？」

彼はわかりやすく驚いた顔をした。

「そうだ。僕はこれでも学年一番をキープさせてもらっている。学力的には君を教える資格があると思う」

「ええ！？ 頭よさそうだとは思ってたけど、あの学校で一番かよ！ すぎえな……。でも教えるって、どこで？」

「僕の家を使おう。君としては帰りに途中下車するだけだし、地理的な条件は悪くないはずだ」

「えええ！？ い、家？」

彼がさらに驚いている。

最後に、その場で決断をさせることが大事になる。絶対に提案を持ち返らせてはならない。

「この提案は迷惑かな？」

「いやいやいや！ こっちが迷惑なわけないだろって！」

彼は慌てたように、胸の前で両手を振る。

「逆にお前が迷惑じゃないのか？ 俺なんか時間使って平気なのか？」

「懸念はその点だけだな？ ならば僕は全然迷惑ではないし、むしろやらせてほしいと思っているから、この話は決まりだ。今日はこちらの準備を整えるので、明日部活帰りにうちに寄ってもらおう。特に用事はないな？」

「え？ あ、うん。用事はないけど」

「ではそれも決定だ。契約書はないが、口頭での約束でも法的には契約として有効だ。一般的には口頭での契約は立証が難しいとされるが、今回はこの車両に乗っている人間全員が証人となる」

「よ、よくわからないけどわかった……」

声が届いてしまった左右のサラリーマンが「はぁ？」という顔で総一郎を見ている。無論、集中している総一郎本人にはなんの障壁にもならない。

「よし。では後で家の場所を送ろう。LINEのIDか電話番号がほしい」

「じゃあどっちも教えるよ」

「ありがとう」

「こ、こっちこそ。なんか悪いな」

無事に彼に勉強を教えられる流れになった。しかも彼のLINEと携帯番号まで入手。

うまく行きすぎて怖い。

(ダメだ。まだ笑うな)

以前、父親との何気ない会話で、「塾講師や家庭教師は生徒と仲良くなることや信頼関係を築くことも大事だが、一番大事なのは『成績を上げること』である」と聞いていた。

総一郎は学生であり塾講師や家庭教師ではないが、今回役割とし

てはほぼ同義だろう。

笑ってよいのは結果が出てからだ。

\* \* \*

電車からホームに降りた隼人は、まだ信じられない思いでいた。

(なんか凄いことになったぞ……)

全教科赤点を取ったこと。追試でも全滅し続け、期末テストが近づいている今でもまだ引っ張られ続けていること。これらは特に深い考えもなく、聞かれたから正直に答えただけだ。嘘についてごまかすことでもないし、せっかく毎日会話をする関係になった彼に嘘をつきたくもなかったからだ。

だがそうしたら、まさかの展開となった。

(でも、嬉しいな)

LINEと携帯番号を交換できたのがうれしい。彼が自分を助けくれようとしているのが嬉しい。彼の家に行けるといっているのが嬉しい。

最高すぎる。こんなコンボが来ようとは思っていなかった。

(うわー今なら空飛べそう)

隼人は両手を広げ、自動改札機に進んだ。

「ぐふっ」

閉まったフラップドアに腹部を強打した。

翌日ー！。

野球部の練習を終えた隼人は、約束どおりに総一郎の家に到着した。

(ず、ずいぶんと立派な家だな)

今日は日が長い時期なので、ギリギリではあるだろうが、まだ明るい。家と庭がよく見えてしまう。

大きな門の向こうには、きれいに刈られた高麗芝が特徴的な、広い庭が広がっていた。そしてスタイリッシュなフラット屋根を持つ、二階建ての建物。屋上ではガーデニングをやっているのか、植木が見えている。

(あいつ、いかにも育ちがよさそうだったもんな)

意外性はないのだが、隼人は築二十五年の普通の家に住んでいる



こともあり、やはり気圧される感じはあった。門柱についたインタ  
ーホンの前で固まってしまう。

(き、緊張する)

前日は嬉しすぎてそこまで頭が回らなったのだが、よく考えたら  
総一郎の家である。緊張しないわけがないのだ。

(準備は大丈夫のはず……なんだけど、不安だな)

練習が終わった後は、水泳部に頼んでシャワーを貸してもらった。  
学ランの中のYシャツは汗を吸収しすぎていたので、脱いでバッグ  
に仕舞ってある。中に着ているTシャツとボクサーパンツもシャワ  
ー後に替えているし、汚れたバッグもしっかり拭いている。用意は  
完璧のはずだ。

(よし、行こう)

ボタンを押す決心を固めるのに結局数十秒を要したが、無事に門  
を乗り越えた。

玄関へと向かう。

「やあ隼人君、待っていたよ」

「こんばんは。息子がお世話になっております」

「ゆっくりしてってくださいね」

(……!?)

事前にLINEで三人家族であるということは聞いていたが、なぜか三人揃って扉の前でお出迎え。

隼人はガチガチになってしまい、どう答えたのかは瞬時に忘れた。何かの言葉を発してアハハハと笑って、カクンカクンと何度も頭を下げた。

辛うじて、父親は長身で眼鏡をかけていて、髪を決めている「できる風サラリーマン」のような容姿であり、どこかで見た顔のような気がしたこと。母親は髪が長く、おしとやかな雰囲気的女性であったこと。そして総一郎はどちらかという父親似だということはわかった。

玄関から中へとあがっても、心臓のバクバクは止まらない。

(晩メシの誘い、遠慮しといてよかった……)

LINEのメッセージでは「よければ夕食も」という話もあった。さすがにそういうのは早すぎるだろうということで全力で辞退していたが、どうやらそれは正解だったようだ。

もしその話に乗っていたら、心臓破裂で生きて帰れなかっただろう。

\* \* \*

総一郎は、自分の部屋に隼人を案内し、部屋の中央にある円卓のところに座るよう促した。

八畳の部屋は普段からきれいにしている。しかし念のため、彼を迎え入れるにあたり失礼がないよう、昨日学校から帰ってから大掃除を敢行していた。

壁際に置かれたベッドも、機能的なデスクも、報道番組しか見ないテレビも、舐められるくらいピカピカにしてある。棚の上に置かれたネオンテトラの水槽も水を替え、フィルタも掃除済。エアコンのフィルタも掃除し、蛍光灯もすべて新しいものに交換している。

部屋着も普段はチーバくんのロングTシャツを愛用しているが、彼に見られたらドン引きされそうなので、きちんとした襟付きのシャツを着た。トランクスも今日はチーバくん柄だったが、シャワー後にディープブルーのシンプルなものに変更した。穴はない。

隼人が円卓の前であぐら座りした。

そして学ランの詰襟が苦しいということ、上を脱いだ。

脱いだ中身はワイシャツではなく、白いTシャツだった。

（ワイシャツはバッグの中か……？ 学ランの下にTシャツ一枚だったのか）

Tシャツ姿はもちろん初披露だ。

総一郎は円卓を挟んで……ではなく、隼人から九十度ほど回った

ところに座った。真向かいではなく、彼の右斜め向かいである。

円卓はさほど大きくないので、生腕が近い。

(なんかエロいぞ……)

前腕は明らかに文化系の学生とは異質だ。構成要素が脂肪ではなく筋肉というのが一目見てわかる。

上腕も、あまり袖が長くないTシャツなので、かなり上の部分まで見えている。いつも部活ではアンダーウェアを着けているのか、あまり日焼けはしておらず、いわゆるポッキー焼けのような感じにはなっていない。だが、ゆるやかに色が移行している境界部は見取れ、それが妙に刺激的だった。胸のたくましさや腹部の引き締まりも、学ラン越しよりずっとリアルに伝わってくる。

(鼻血注意だな。ここで出たら人生終了だ)

気を引き締め、隼人に話しかけようとした……が。

彼が胸を押さえて深呼吸をしている。

「ん、どうした？ 隼人君」

「いや、緊張したなーって。ほら俺、お前んちに来るの初めてだし」

「緊張か。まあ初めてというのは緊張するだろうな」

お互いにな、と総一郎は心の中で付け加える。

「さて、時間もないことだし、始めようか」

「そ、そうだな……って、お茶かよ？」

彼の手に握られているのは、シャーペンではなく湯のみ。円卓の上におかれているのは、お茶と茶菓子のみだった。今のところは筆記用具すら置かれていない。

「ああ。今日はまず打ち合わせに時間を使おう」

「打ち合わせ？」

「そうだ。なぜ君が点数を取れないのか、その理由を見極めないといけない」

「理由、か。考えたこともなかったなあ」

腕を組んだ彼。

「まず、テスト勉強はいつもどうやっている？」

「どうやって……教科書を見直して、ノートを見直して……」

「……。それで点が取れないわけだよな？」

「取れてないな、まったく」

「では……。仮に部活の時間が縮まって、勉強時間を今より増やせるとしよう。そうなったときに点が取れそうな気はするのかな」

「取れる気はしないかなー。やっぱり俺、頭がちよっと。もし取れたら友達がびっくりしすぎてショック死しそう」

笑いながら頭を掻く隼人。

彼は照れたり恥ずかしがったりするとすぐに頭を掻く。どうやら癖なのだというのは、すでに総一郎も把握済みだ。

だが今の位置関係でそれを右手でやられると……袖の奥の脇の下

が見えてしまう。

腋窩を構成しているしっかりした筋肉の壁と、薄い毛。

心の準備ができていなかった総一郎の心臓が跳ねた。軽い浮揚性めまいのような感覚に陥り、視界もホワイトアウトしかけた。

（み、見てはだめだ……。家庭教師も塾講師も、その仕事は脇チラで動揺することではない。『成績を上げること』だ。まずは結果を出さねば）

現世に踏みとどまれるよう、必死に心身に喝を入れた。

「少し考えたい。三分くれ」

三分？ と首をひねる隼人をよそに、総一郎は目をつぶり、思案に入る。

彼の勉強の仕方は……たぶん悪いのだろう。普通の人であれば、彼のやり方でも悪くはないのかもしれない。だが彼はそういう次元には存在していない。

そして致命的な問題がある。「点が取れる気」がしないのにそのまま勉強していることだ。取れるイメージが湧かないからモチベーションも上がらず、勉強の質が悪くなる。勉強の質が悪くなるから点が取れず、ますます点が取れる気がしなくなる。悪循環以外の何物でもない。

これを解決するには……。

総一郎はアイディアをまとめていく。

「よし。わかったよ。君がどうすればいいのか」

「ホントか？」

「君は一度まともな点を取るといい。まともな点を取って、周りの人たちに褒めてもらうんだ。そうすれば今後点が取れそうな気がしてくるし、その状態で勉強すれば、きっと今よりも質の高い勉強ができるようになってくる」

「そうなんだ？ 俺なんかでも一度まともな点取ればイケる感じ？」

「ああ。勉強の第一歩はイメージーションとモチベーションだと思っている。いい点が取れそうだと思うって勉強するのと、どうせ取れないだろうなと思って勉強するのでは、その効果が大きく異なるからね」

「おお！」

ウキウキした声を出した隼人だったが。

「……って。俺、その『まともな点を取る』ってのができないから困ってるんだけど」

ガクッと彼の肩が落ちる。

だが、この答えも総一郎はすでに用意していた。

「ならばズルすればいい」

「え、カンニングとかか？ 悪いことをするのはちょっとな」

「もちろん合法的なズルだ。今回それを僕が教える」

総一郎は湯のみを口に運び、のどを潤した。

「まずは教科書とノートを用意してだな……」

「うん」

「閉じたままにしておく」

「ん？ 開かないのか」

「ああ。どちらも補助的に使う。メインで使うのはこれまでに落ち続けた試験の過去問だ。持ってきているな？」

「LINEで言ってたやつか。全部持ってきてるぞ」

五分くれー。

総一郎はそう言うと、本試一回・追試二回の合計三回分の過去問を高速で眺めていく。

そして宣言どおり五分でチェックを終え、確信を得た。

「やはりな。出ている問題は同じだ」

「ちょっと待て。全部違うだろ？」

「いや。試験攻略の観点で言えば、この三回の試験はすべて同じ問題だ」

「そ、そうか。お前が言うなら、そうなのかな」

「少し出し方を変えているだけなんだ。問題は解くよりも作るほうがずっと労力が必要。作る先生は忙しいだろうし、完全な新作は出してこない。旧作のアレンジのみになるのは自然な話だ」

「……」

「だから君は、この三回分の問題を使って勉強するだけでいい。他



は何もしなくていい。それだけで、次の追試については受かるだけでなく、ミまともな点数ミが取れるだろう」

「へー。なんか裏技っぽい」

「ああ。まずは学力アップというよりも、まともな点を取って気持ちよくなるのが大切だ。君はそこから始めなければならない。勉強の第一歩はイメージネーションとモチベーションだ」

「気持ちよく、か。わかった」

「僕がナビするから、だまされたと思ってやってみてほしい」

「よろしく頼む」

直近の追試験が28点で、もっとも合格点に近かった世界史Bくらいこーー。

ということ、総一郎は隼人に対し、設問と解答を声に出して読むように指示した。そして選択問題については、選択肢の内容もすべて読むように、と付け加えた。

「四択で正解を一つ選ぶ問題でも、選択肢を全部見直すのか？」

「そのとおりだ。他の選択肢はなぜ違うのかをはっきりさせる。そうすれば、その一問だけで四問勉強したことに同じになるし、問題を少しアレンジされても対応できるようになる」

「へー……」

総一郎は、彼が読みあげた設問や回答の選択肢の内容について、こまめに突っ込みや質問をしていた。そして隼人の受け答えやその表情、声のトーンや仕草に至るまで、厳しくチェックをしていた。彼の記憶への定着度がどの程度か確認するためと、会話形式にすることで記憶に残りやすくするためだ。

覚えていない、もしくは覚えていても怪しいものについては、そこで必ず調べさせた。使う順番はノートが先。それでも載っていないのは教科書を使ってもらった。

世界史Bが終わったら、他の教科に入る。

やることは同じ。三回の過去問の徹底的な見直し。他はいっさいやらない。

「よし。今日はここまでにしよう」

「あー！ つかれたー！」

総一郎が終了宣言したときには、完全に夜になっていた。時間の都合もあり、ほぼ休憩なしだった。

野球部で体力があるとはいえ、また違うエネルギーを使うのだろう。彼が大きく伸びをして、後ろにバタンと仰向けで寝ころんだ。

「はは。それは集中した証だと思……………!!？」

総一郎はねぎらいの言葉をかけようとしたが、途中で止まってしまった。

彼は伸びをしたまま仰向けになったので、シャツの裾から腹部が露出していたからである。

（なんだ、このサービスタイムは…………）

もちろん彼は見せつけているわけではなく、見えてしまっているだけなのだろう。

だが、引き締まった生腹筋に、きれいな生ヘソ。学ランのズボン上からはみ出すディープブルーのパンツーおそらくボクサーパンツー。据え膳にも程がある。

総一郎の頬は瞬時に熱くなった。

彼は脱力した状態で目をつぶっている。

どうする？

手を伸ばすか？

それとも手を伸ばすか？

あるいは手を伸ばすか？

もしくは手を伸ばすか？

(なんてな。そんなことは論外だ)

総一郎は意識的に顔を逸らした。

彼はここに教わりに来ている。そうなれば、やはり自分は家庭教師や塾講師と同じ。役割は彼に追試で点を取らせることだ。

総一郎は、庭の門の外まで隼人を送った。

「今日はサンキューな！」

「ああ、気にする……な……!?!」

まるでヘッドロックのように、彼の腕が乱暴にギュッと首に巻き付いた。

男友達ではけっして珍しい光景というわけではない。運動部であろうが文化部であろうが、よく見られるものだろう。

なのに、首から脳天に至るまで瞬時に熱くなる。

暑い季節に、発火しそうなくらいの熱さ。

でもそれがなぜか心地よい。

距離が近いので、彼の香りを強く感じる。頭がクラっとした。

腕はすぐに離れ、彼も離れた。それがとてつもなく惜しかった。

「じゃあ、おやすみ！」

最後は、向き合った隼人のほうから手を差し出してきた。天使のような笑顔付きだった。

「ああ。おやすみ」

総一郎も手を差し出し、握り返した。そこで気づいたが、握手するのも初めてだった。

野球部の、硬い手だった。

\* \* \*

（あれは失礼じゃなかったよな？ 大丈夫だよな？）

隼人は、総一郎邸を後にして電車に乗ってからも、心臓がバクバクと鳴っていた。

腕が総一郎の首に回ったのは無意識だった。部活の仲間にはよくやるし、やられることもある。

だが、やってから気づいた。やはり彼は他の友人とは違う、と。距離が近いので、彼の香りを強く感じる。頭がクラっとした。

腕を回しているのは自分なのに、あたかも自分の首が絞められているかのように視界が急速に白ばんでいき、ホワイトアウト状態になりかけた。

しかもそんな状態なのに、腕を外すことがもったいないと思った。他の人にやっても、あのような感覚にはならないはずだ。

さらには、照れ隠しとカモフラを兼ねてやった握手。手を握るのは初めてだったが、その感触を忘れたくないとも思った。

（あいつ私服姿もよかったな。きっちりしてた。俺なんかと違って、家でもちゃんとしてるんだらうなあ）

そうやって総一郎の姿を思い返していたら、乗り過ごすところだった。

ギリギリでなんとか電車から降り、隼人は家へと帰った。

一日だけではやりきれなかったため、隼人は翌日も総一郎の家に行き、勉強のやり方を教わった。

そして、追試の追試の追試を受けた――。

「総一郎！」

朝の電車で、乗ってきた総一郎を見るなり、隼人は立ち上がってしまった。

「どうした？」

席の前に来た総一郎が、とりあえず座れ、と両肩を押さえてくる。座り直しながら、隼人は報告をした。

「やったよ！」

「ん？」

「追試、全部通った！」

すると彼も、怜悯な顔をわずかにゆるめた。

「そうか。よかった」

「追試の問題、全部見たことがあるような問題に見えた！」

「ああ、そうなれば勝ったも同然だ。きちんと準備さえできていれば、学校のテストというものは、それまでに用意した引き出しを開けるだけだ。頭を使う問題など実はほとんどない」

「お前、すごいよ！　ありがとう」

「おめでとう。君が頑張った成果だ。僕は一回で変わった君がすご

いと思う」

今度は総一郎のほうから、手を差し出してきた。

隼人はその白い手を強めに握り返し、そのまま彼の顔を見た。

微笑のレベルからは逸脱していない。だがなんとなく、彼も心の底から喜んでくれているような気がした。

そして、彼が褒めてくれた。それが隼人には嬉しかった。

「先生やクラスメイトからも反響があっただろう？」

「めっちゃあった！褒められたし、明日は大雪が降るとか言われた！」

「そうなるとやる気が出るから、次も点を取りやすくなっていく。

しばらくはその好循環が続くようにしたい。期末テストも対策法を伝えたいので、今週中にまたうちに来てほしいけど、どうかな？」

「ぜひ！ぜひぜひ！ぜひ頼む！」

「じゃあ決まりだ。また先生やクラスメイトに褒められるようにがんばってくれ」

「ああ！またお前に褒めてもらえるようにがんばるよ！」

改札を出てからも、高揚感は止まらない。

（期末もがんばろっと）

また彼の家に行くことができる。そう思うと、自然と足取りも軽くなる。

いつもよりも早く校門までたどり着いた。

（よし。勉強の第一歩はイメージーションと……あれ、なんだっけ？ なんとかベーション……マスターベーションだっけ？ もう忘れちゃった……。明日あいつに確認しよっと）

隼人は空を飛んでいるような感覚で、学校の敷地へと入った。

（『忘却はよりよき前進を生むが、それを言ったのがニーチェなのかフルーチェなのかはわからない話』 終）



オセロで白と黒をひっくり返していると性別までひっくり返りそうに思える話

「あー、疲れた！ ちょっと休憩っと」

隼人は大きく伸びをすると、学習デスクから離れた。

5・5畳の自室。窓とは反対側に置いてあるベッドに仰向けになり、目をつぶる。

しかし、すぐにパッチリと開け直した。

（あ、これ休憩のつもりでこのまま朝まで寝るやつだ。あぶないあぶない）

前科は無数にある。同じ過ちを繰り返さぬよう、ベッドからも離れた。

野球部の練習の疲れはあるが、期末テストでも点を取るため、毎日勉強をしないといけない。

あいつも褒めてくれるだろうしー

と、隙あらば彼が頭に出てくることに苦笑いしながら、隼人はゴ口寝以外の気分転換を模索した。

（スマホでも……って、塞がってたか）

何かすぐに終わるようなミニゲームでも、という発想に至ったが、今はいつもプレイしているRPGを立ち上げたまま自動モードにし

ている。使えない。

自分専用のパソコンもないため、どうやらこの部屋の中では問題が解決しないようである。

そこで、隼人はリビングにあるパソコンを使うことにした。

「パソコン使うから」

階段を降りてから、キッチンのところにいる母親にそう言うと、どうぞご勝手に的な返事が返ってきた。

(オセロでもやっか)

リビング壁際のラックにおいてあるデスクトップパソコン。ブラウザを開くとヤフーのトップページが表示されるようになっている。隼人はヤフーゲームにログインし、オセロを選択した。

夜ということで、席に待機状態となっているプレイヤーはたくさんいる。

上からざっと眺めていった。

(ん？ soichiro16?)

そのユーザー名に目がとまった。

例の彼のような名前である。

(いや、まあ、絶対違うんだらうけど)

彼——総一郎は、インターネットを調べ物やニュースサイトの閲覧くらいにしか使わないイメージだった。ブラウザゲームなど絶対にやらないだろう。

そして万一やったとしても、同じ時間で同じゲームに入り込む確率など、限りなく0パーセント。

(ま、何かの縁か。対戦を申し込んでみよっと)

隼人はポチっとゲーム開始ボタンを押した。

あっさりと対戦が承認される。

相手が先手番・黒のほうに座っていたため、隼人は後手・白である。

隼人が相手の初手を待っていると、ゲーム画面下部にあるチャット欄のところに、あいさつが飛んできた。

『隼人君、よろしく願いします』

(なんだ? いきなり君付けか?)

隼人はモニタの前で首を傾げた。

こちらのユーザー名はhayato2525なので、隼人という漢字表記で来るのはまあわからなくはない。ハヤトといえばほぼその漢字だからだ。

だが、君付けはやや違和感があった。

ゲーム内のチャットといえば、普通はさん付けだ。初対面で君付

ける人は見たことがない。

(君付けといえは……。いや、まあ、ありえないだろうけど)

また彼の顔がチラつくが、すぐに打ち消した。

とりあえずこちらも挨拶を、ということ、隼人は両手の人差し指だけでキーボードを叩く。

(えーっと。よろしく、総一郎……って、やべ、変換しちゃった。

しかもこの漢字、あいつと同じじゃねーか)

このまま送るわけにはいかないので、直そうとした。

だがバックスペースキーを押したつもりが、エンターキーを押してしまった。

無情にも送信されてしまう。

『よろしく、総一郎』

隼人は自分のパソコンを持っていない関係で、キーボード入力はずいぶん前に学校の授業で少しやった程度。慣れていないがゆえのミスだった。

しかも名前に「さん」も付けていない状態で送信してしまった。大失敗だ。

だが、アチャーと隼人が思ったのとほぼ同時に――。

『誤って君付けしてしまいました。申しわけ』

と、相手からも中途半端なメッセージが来た。

タイミングが早すぎるので、こちらのミスメッセージを見てから打ったものでないことは明らかだ。

隼人がメッセージを送ったときにはすでに打ち途中だったものを、ミスして送ってしまった……そんな感じだった。

(こっちが変な返し方をしちゃったからびっくりして、間違えてエラーキー押しちゃったのかな?)

隼人はそう思いながら、とりあえずこちらも一言謝罪をと思い、またキーボード入力をしようとした。

が、いかんせんタイプが遅い。途中で相手が一手目を打ってしまった。

対戦開始だ。

訂正と謝罪のタイミングを逃した隼人は、打ち途中のメッセージを消し、仕方なくそのまま対戦を進めた。

(あ、隅取られた)

さっそく隅を取られた。

(あ、また取られた)

次は自分が、と思っていたが、二箇所目の隅もあっさり取られてしまった。

さらに相手の猛攻は続く。

(こいつ……強すぎないか?)

最終的に四隅を全部取られ、あつという間に大惨敗となった。画面は黒石だらけで真っ黒に染まった。

こちらは考慮時間を制限ギリギリまで使い切ったが、相手はほとんど使っていない。それでこの差である。

(もう一回頼んでみよっと)

一回だけではまぐれという可能性もある。そう思った隼人は、再戦を申し込もうとした。

相手が離れる前に申し込まないといけない。スピード勝負だ。

(えっと、「もう一回やらないか」と送らないと……。もう一階……いや一階ってなんだよ。一回だよ……一介……なんだこのパソコン、変換壊れてんの?)

焦る。

バックスペースキーで誤変換の「一介」を消そうとしたら、慌ててしまい「もう」まで消してしまった。

さらに焦る隼人。

そこで相手から『ありがとう』というメッセージが来てしまった。

(やべ！ ログアウトされちまう！)

隼人は慌ててエンターキーを押した。

『やらないか』

そんな文が送信されてしまう。

(なんかちょっと変な感じになったぞ……通じんのか?)

不安しかなかったが、とりあえずログアウトはとめられたようだ。相手の名前が消えることもなければ、「退席しました」のメッセージも出ない。

ホッとした隼人は、今度は落ち着いてもう一文補足した。

『先攻後攻入れ替えてもう一回やらないか?』

すると、返事が来た。

『よろしく』

めでたく、今度は隼人の先手・黒で二戦目が実現した。

隼人は気合を入れて対戦を始めた……

……ものの。

(ああ?)

まだ最後までやっていないのに、全部の石が白になってしまった。

(これ、パーフェクト負けってやつじゃねーか……)

呆然とモニタを見つめる隼人。  
そこに後ろから声が飛ぶ。

「スゲー！ 兄ちゃん、こいつめっちゃつえーじゃん？」

隼人が振り向くと、そこには黒いタンクトップ姿で中学二年生の弟・日向ひゅうががいた。いつのまにか後ろで観戦していたようだ。

「オレにもやらせて！」

パソコンチェアごと強引に隼人をどかすと、日向はパソコンの前に立て膝になった。

「あ、いいけどアカウント変え……あ、こら」

とめる前に申し込みボタンを押してしまった。

彼もパソコンは持っていないのだが、今ちょうど中学の授業でパソコンをやっているらしく、隼人よりもタイプが速い。

バドミントン部所属のため色は白いが、かなり引き締まった両腕を伸ばし、日向はカタカタと軽快にキーを叩く。

『お前つえーなwwwもう一回やろうぜ！』

そんなテキストメッセージを相手に飛ばしたようだ。

隼人は慌ててパソコンチェアから離れ、弟の肩を掴む。



「お前……しゃべりかた、もうちょっとなんとかしろよ。中身変わったのが向こうにバレるだろーが」

「だいじょーぶだって！ どうせ相手とリアルで会うことなんてないだろ？」

「そういう問題じゃねえよ！」

憤慨する隼人だったが、相手も承諾ボタンを押したようだ。

「よろしく」という返事も来て、相手の先手、日向の後手で三戦目が開始された。

隼人はパソコンチェアに座り直さず、横で観戦した。

割と日向は善戦しているように見えた。途中、かなり白が多くなり、隼人は感心してしまう。

「へー。お前、けっこうやるな」

だが日向の表情はやや厳しい。

「兄ちゃんはどうせ知らないと思うけどさー。オセロって途中の数じゃ勝敗決まんねーよ？」

「そうなのか？」

「うん。あー、マズいところ取られた。これダメそう」

彼の形勢判断のとおり、終盤になって一気に黒が盛り返し、あっという間に盤面が真っ黒になって終了した。

「うげー。負けた」

隼人よりも長い髪の毛を両手で掻き、日向が悔しがる。

「こいつたぶんマジでつえー。兄ちゃんじゃ死んでも勝てなそう」

そう言いながら、カチャカチャとキーを叩いた。

『おめー強すぎだろwww天才かよwww』

またおかしな調子でメッセージを飛ばされ、隼人は慌てた。

「あっ。だからその口調はやめろって」

「いいだろ別に」

日向はどこ吹く風。

そしてさらに、日向とは別の高い声が、別方向から飛んでくる。

「わたしにもやらせて」

今度はTシャツ姿のショートヘア、小学四年生の妹・夏葉<sup>なつは</sup>だ。

隼人は三人兄妹であるので、一番下が彼女である。空いていたパソコンチェアにいつのまにか座っていた。

「お前もやるのか……」

呆れる隼人をよそに、夏葉はパソコンチェアに乗ったままパソコンの前に行く。

日向とポジションをチェンジした。

「わたし『じょうせき』しってるから、いいしあいできるよー」

何やら自信満々である。

「わたしアルファベットもよめるよ。あいてはそーいちろーだね。おにいさんだ」

そう言いながら、夏葉はキーを叩く。  
人差し指打ちなのに、かなり速い。

『じゃあおにいさん、もういっかいいくわよ』

変換キーを押さなかったのか、全部ひらがなで送信されている。

「だから中身変わったのバレるから、もっとうまく演技しろって…  
…。」  
「というか、おにいさんじゃなくておじさんかもしれないだろ。  
勝手に相手の歳を決めつけるなって」

呆れ半分の隼人の前で、四戦目が開始された。

定石などまったく知らない隼人ではあるが、序盤に相手と妹の打ち手が噛み合っていたのは雰囲気であわかった。

そして中終盤のねじりあいも見ごたえがあった。

知っているもの同士がやっている。そんな感じだった。

「そこに置いてもすぐひっくり返されるだろ」

「うん。でもいまはそのほうがいいの」

「ん？ 端っこ取れるのに、取らないのか？」

「まだそこはとらないほうがいいよー」

一見無駄に見える手。一見チャンスを逃しているように見える手。そのようなものも、実は意味があるようだ。

終盤に入っても、どちらが勝っているのかわからないまま試合が進んだ。

だが、最後の最後でわずかに白・相手が上回ったようだ。僅差で相手の勝利となった。

「夏葉、お前すごいな。もうちょっとで勝つところだったんじゃないか？」

隼人が感心して妹を褒める。弟・日向も「スゲー」と笑っていた。だが、当の夏葉は首を振る。

「ううん。かずのさはちょっとだけだったけど、じつりよくのさはけっこうあるとおもうよー。あっちのおにいさん、すごくつよい」

隼人の目には、妹の言う「実力差」はよくわからなかった。

が、野球でも、ほんのちょっとした差に見えて、裏に実は大きな努力差や実力差が潜んでいることはある。妹の言っていることは本当なのかもしれないと思った。

そして隼人が考えているうちに、夏葉がまた文字を打っている。

『わたしつよいおにいさんすきよ』

「お・ま・え！ 変なメッセージ送ってんじゃねえよ！」

頭を掴む。だが妹はまったくへこたれない。

「あ、あっちのひと、もうやめるって。おわりのあいさつしとくね。えーっと」

また人差し指で素早くキーを叩く。

『ありがとう、つよいおにいさん。およめさんにはなってあげられないけど、げんきでね』

「だから変なメッセージ送るなって言ってるだろ！！」

「えー」

「これはさすがに訂正しないとやべーよ」

妹を強引にどかせて、隼人は自分で文字を打とうとした。

「あ、むこうログアウトしちゃってる……」

間に合わなかった。

すでにsoichiro16の名前は盤面から消えていた。

『退席します。ありがとうございます』という発言だけが、チャット欄に残されていた。

\* \* \*

翌日。

「おはよう……」

「おはよ……うわ、お前、なんかげっそりしてないか？」

朝の電車でヨロヨロと席の前にやってきた総一郎を見て、隼人は  
その言葉をかけた。

「ああ……少し……体調がな……」

「大丈夫か？ 席代わるぞ。ホラ」

隼人は席から立ち上がり、彼の背中に右手を回した。

体に力が入っておらず、彼の体が簡単に引き寄せられた。

一瞬ドキッとしたが、相手は体調不良。すぐに気を取り直す。

「は、隼人君……」

「どうした？」

総一郎は、顔が隼人の耳元あたりに来ている状態じゃべった。  
そのため、耳がくすぐったい。

隼人は顔も熱くなり、焦る。

「君は……どこかにお嫁に行ってしまったり……しないよな？」

そこでこのセリフである。

顔の熱は一気に引き、隼人は笑ってしまった。

「いきなり何言ってるんだ？ あるわけないだろ。俺、男だぞ？」

だがなぜか。隼人が突っ込みを返したその瞬間――。

フニャフニャしていた総一郎の体に、芯が入ったような気がした。

「そうか。よかった」

そんな言葉とともに、彼の手が隼人の肩にかかる。肩先ではなく、肩上部の筋肉を包み込むような、フワツとはしているが力強さもあ  
る握りだった。

隼人は席のほうに押し戻された。

「ん、座らなくていいのか？ 体調悪いんだろ？」

「いや。たった今、体調はとても良くなった」

「へ？」

( 『オセロで白と黒をひっくり返していると性別までひっくり返り  
そうに思える話』 終 )



『靈長類 浅倉南へ』な話

「そうそう。今度お前の学校行くぞ」

総一郎が隼人からそう言われたのは、水曜日朝の電車の中でのことだった。

「残念ながら日曜日に野球の練習試合でだけどな。頑張ってくるよ」

髪を掻きながら、かなりバツが悪そうに笑う彼。

総一郎の気持ちは瞬時に高揚した。

(これは……！ 野球をする彼の姿が……初めて見られる？)

さっそく、『ならば応援に行かなければならないな』と答えようとした。

が、寸前で思いとどまった。

(ちょっと待て。失敗はこういう気分るときに起こりやすい)

ここは落ち着いて考えるべきということで、総一郎は一度心の中で深呼吸。隼人からかけられた言葉を、高速かつ慎重に振り返った。ここでつまらないミスを犯して評価を下げるのがあってはならない。

まずは、彼の言葉の「残念ながら日曜日」という部分に注目した。

生徒会役員というものは、行事直前などの繁忙期以外、日曜日に学校に行く用事はない。そして今が繁忙期でないことは、つい数日前に電車内で生徒会の話題になったため、隼人も知っている。

そのうえでの「残念ながら」である。

彼は「見に来てくれ」とは一言も言っていないし、そこにあえて応援に行くという行為は、積極的すぎて引かれてしまう可能性があるのではないだろうか。

さらに精査すると、「残念ながら」が「日曜日」だけでなく「練習試合」にも係っているのではないか、という疑惑も浮上した。

彼は野球部のレギュラーで、ポジションはピッチャー。ガチの球児である。

そして高校の野球部となると、学校の看板を背負って戦うというイメージが強い。

そう考えたときに、『対外試合で堂々と相手の学校を応援する生徒会役員』というのは、彼の目にはどう映るのだろうか？

野球部員でない総一郎としては推し量るのが難しかったが、彼の中の『総一郎の株価』が大幅に下落するリスクがあるような気がした。

（あぶない。ストーカー認定されたあげく生徒会失格の烙印を押される可能性もあった）

模試で出題される問題は簡単だが、彼が出題する問題は非常に難しい。

（『休むも相場』『最初のチャンスは見送る』などの格言もある。

ここは自重しよう)

総一郎は『見にいきます宣言』を返すのはやめることにした。

「そうか。生徒会役員として堂々と対戦相手を応援することはできないが、よいプレーができるよう心の中で祈っているよ」

無念ではあったが、総一郎は平静を装い、そう返した。

駅の改札を出て学校に向かいながら、総一郎は考える。

彼が野球をしているところ。

想像は何度もしたことがあった。

きっと、通学のときや勉強のときとは全然違う雰囲気になるのだろう。そう思っていた。

(やはり、見たいな)

見たい。

見たい見たい。

見たい見たい見たい。

見たい感情がどんどん増殖して頭の中を占有していくなか、総一郎は信号のない横断歩道を渡ろうとした。

「――！」

車の急ブレーキの音。総一郎の足も止まる。

総一郎の目の前で、一台の軽自動車が止まった。

「悪い、兄ちゃん。大丈夫か？　ここはいつもコンビニ客の迷惑駐車が並んでてよ。渡ってくる奴が見えにくいんだわ」

開いた窓から中年男性がそんなことを言った。

と同時に、一つのアイディアが出てきた。

(なるほど。その手があった)

総一郎は運転席のほうに回ると、男性に話しかけた。

「ありがとうございます。おかげでよい案が浮かびました」

「ん？　いい案？　なんのことだ？」

「日曜日まで今日を含めて四日。努力できることは色々あると思います。頑張ります」

「はあ？」

総一郎は一礼すると、ふたたび学校へと向かって歩き出した。

\* \* \*

日曜日の朝。

総一郎は、通っている学校の旧校舎四階の外階段にいた。

現在は理科・家庭科・美術科などの授業でしか使われていないものの、天井の低さ以外はさほど古さを感じず、かなり重厚なコンクリート造りの校舎である。

外階段も手すりの部分までコンクリート造りであり、外からは胸から上しか見えない。発見されにくいうえに、いざとなったらしゃがんで隠れることも可能だ。

水曜日の昼休みに、場所探しを済ませていた。

グラウンドにある野球場を三塁側から見下ろすようなかたちになり、ピッチャーである彼のがよく見える。それでいて、逆に野球場のほうからはまず目に入ることはない。

それがこの場所だった。

そう。

総一郎は今回、彼の試合を「こっそり見る」ことにしたのである。

空に浮かぶ雲の色は、白い。

(彼の眩しさは六月の空すらも浄化し尽くすかー)

雲量も四割以下といったところ。梅雨入りしていることが嘘のようなく、非常によい天気の日曜日だった。

(準備はおそらく完璧だ)

念には念をということで、木曜日に購入したチャコールグレーの「用務員作業服」および水色の「作業帽」を、先ほど着用して変装していた。

目にも眼鏡ではなく、ワンデータイプのコンタクトレンズを着用している。これは双眼鏡を使いやすくするためと、万一彼のチームメイトに発見された際、『メガネかけてる奴が変なところで試合を見てたぞ』となって隼人にバレてしまうことを防ぐためである。

さらに、水曜日の放課後に本屋で野球の専門書を購入し、その日のうちに読破していた。知識なしで見るとは失礼と考えたためである。ルールは一通り理解済で、スコアブックをつけられる程度の知識はついた。

それに加え、野球漫画『MAJOR』全七十八巻と『タッチ』完全版全十二巻も購入しており、金曜日と土曜日で読破。野球で起りうるドラマもある程度は把握している。

死角はない。

隼人の学校のチームが、試合前の練習をおこなっている。

マウンドの上にはもちろん彼の姿。背番号はエースナンバーの一番をつけていた。

オーバースローの投球フォームはよどみがなく、腕もしなってい

るように見える。

(速い。何キロ出ているのだろう)

キャッチャーミットにボールが吸い込まれるたびに、都度気持ちのよい音が総一郎のところまで届いてくる。

受けているキャッチャーがときおり大きくうなずいて返球しているので、今日の調子は悪くないのだろうと思われた。

(しかし……。野球のユニフォームというのは、体の線が出すぎじゃないか?)

今までそんなことは気にしたことがなかった総一郎だったが、彼が着ているとなると、どうしても注目してしまう。

しなやかそうな肩や腕の筋肉は、一緒に勉強をしたときにも見ている。免疫はあった。

だが問題は下半身だ。ユニフォームがピッタリしているので、筋肉が発達した臀部や太ももなどが強調されている。それでいてスタイルの良さに起因するシャープさもあるため、そのシルエットは絶妙なバランス。

非常にけしからん姿である。

(ああ、いけない。こういう見方は真面目にプレーしている彼に失礼だ)

総一郎は一度首を振った。

練習が終わったのだらう。選手たちがいったんベンチに引き上げていく。

戻る途中、隼人に対し他の選手たちが笑顔で何かを言い、背中や頭をポンと叩いていた。

隼人以外は全員三年生なのか、それとも同じ二年生も混じっているのかはわからないが、彼もそれに対し笑顔と軽い会釈を返していたようだ。絆が固そうに見える。

(……)

隼人と話すときはいつも一対一だったので考えたことはあまりなかったが、当然、彼には部活のチームメイトもいれば、クラスの同級生もいるのである。

あの性格だ。きっと友達も多いのではないだろうか。

今、知らない人間たちが彼とコミュニケーションを取っているのを見ている。

微笑ましいという思いとともに、少し乾いた寂しさのような、なんとも言えぬ感情が沸き起こってきた。

これは――。

(嫉妬か。潔く認めよう)

こればかりは仕方ない。

彼とは、学校も違えば学生としての属性もまったく異なる。知ら



ない領域や知ったとしても入り込めない領域が広大であることは、前からわかっていたことだ。

今発生した問題ではないため、ここで悩んでも意味はない。

頭はサッと切り替わったが、直後、総一郎の目は驚きで見開かれた。

ベンチに座って帽子を脱いだ隼人に、一人の女の子が後ろから近づき、タオルを首にかけてのだ。

そして隼人は後ろを振り向くことなく、片手を軽くあげて応えたように見えた。

(なっ……)

総一郎は用意していた双眼鏡をサッと構え、事件現場を十分に拡大した。

その女の子は、背は低めだ。髪型はショートで……前下がりのボブというものだろうか？ 服装は黒のハーフパンツに、紺のTシャツ。女性マネージャーでありがちな格好である。

ジト目無表情なのでわかりづらいが、どちらかというところ綺麗系というよりも可愛い系の属性で、おそらくかなり器量よしであろうと思われた。

(マネージャーなのは間違いなさそうだが……)

気になったことがいくつもあった。

タオルを渡すのはふつう笑顔とともに起こす行為だと思われるのだが、ジト目無表情のままであったこと。後ろから不意打ちのように首にかける渡し方だったこと。彼が振り返らずに返礼をしたこと。これは――。

（相当な付き合いの長さで信頼関係がないとありえない）

野球漫画『タッチ』でいうところの浅倉南、正ヒロインポジションの可能性はある。最大級の警戒が必要かもしれない。

総一郎の双眼鏡を持つ手に、力が入る。

そして追い打ちをかけるように、男性部員が一人、笑顔で頭を下げながら飲み物を隼人に渡した。彼も笑顔でそれを受け取る。

雰囲気的にその男性部員は先輩ではなさそうだ。同級生もしくは後輩か。今はジェンダーレス社会。男でもマネージャーで浅倉南ポジションという可能性はゼロではない。

そのまま見ていると、さらに他の男性部員が次々と隼人に声をかけていく。

（ああ、ダメだ。彼にアクションを起こす人間がみんな浅倉南に見えてきた）

霊長類、浅倉南へ。

読む野球漫画は『MAJOR』だけにとどめておくべきだったか、と総一郎が悶々としてみると、両チームの選手がホームベース前で向かい合うように整列し始めた。

いよいよ試合開始のようだ。

（さっきから余計なことを考えすぎだ。このような体たらくでは彼の試合を観戦する資格はない）

今度は頭を一度ではなく何度も振り、雑念を取り払いにかかった。

（試験と同じく集中しなければ）

それはなんとか成功し、プレイボールの声がかかるころには頭が観戦モードに切り替わっていた。

隼人の学校が先行で、ホームである総一郎の学校は後攻のようである。

（ほう。隼人君の打順は一番なのか。がんばれ）

右バッターボックスに立った隼人の背中に、総一郎は応援の念を送った。

バレなければ。声さえ出さなければ。

思う存分に観戦・応援しても問題はない、はず。

少なくとも、隼人本人にダイレクトでバレる可能性は極めて低い。ピッチャーマウンドでは前を見ているし、バッターボックスでは背中をこちらに向け続けることになる。角度よし、距離もよし。

ここで見ている限り、ファールボールがたまたまこちらに飛んこない限りは大丈夫だろう。

——カキーン。

(うわっ)

総一郎は驚き、コンクリートの手すりに隠れるようにしゃがみこんだ。

ゴンという音と、衝撃。

(……!?)

彼の大きなファールボールが、階段の手すり部分に直接命中したようだった。

(限りなく確率がゼロに近いはずの事象が起きたぞ……いったいどうなっている)

総一郎は念のため、少し時間をおいてから顔をあげた。

彼の打順は終わっていた。塁にはいなかったため、残念ながら凡退してしまったようだ。

バックネット横にある黒板のスコアボード。

並んでいるのは、上段も下段も「0」の文字。

隼人は会心のピッチングを続けている。

しかし打線も総一郎の学校のエースを攻略できず、均衡状態とな

っていた。

(うちの学校、進学校のわりには運動部も強いからな)

生徒会は、『壮行会の開催』や、部活動の活動報告が載る『会報の編集・発行』も大事な仕事である。そのため、おのずと各部活動の成績にも詳しくなってしまう。

総一郎の学校の野球部は、昔からまあ強い。

昨年夏の地方大会もベスト十六に入っており、今期も評判は悪くない。今日投げているエースも軟投派ではあるが大崩れすることが少なく、打線もかなりの破壊力があると聞いていた。

(うちの打線を抑えるのは大変なはず。隼人君はすごいかもしれない)

まだ三年生が引退していないのに二年生でレギュラー、しかもエースと聞いていたため、きっと良い選手なのだろうとは思っていたが、それを直に確認できるというのはうれしい。

総一郎は顔をほころばせながら観戦を続けた。

均衡が崩れたのは、6回表だった。

隼人のレフト前シングルヒット、および二塁への盗塁から打線がつながり、彼の学校に1点が入った。

(たしか打順1番というのは、出塁率が高くて走れる選手が適役だったはず。彼、バッターとしてはそういう選手ということなのだろ

うな)

彼についての新しい知識が増えていくのもありがたい。

流れは隼人の学校へ傾いたと思われた。

隼人の今日の調子を考えると、このまま試合が終わってもおかしくないと思っていた。

ところが。

(ん?)

8回裏、隼人の快速球にタイミングが合ってきたのか、それとも彼が疲れて球威が落ちてきたのか。先頭打者がセンター前ヒットで出塁し、二人目の打者もレフト前ヒットで続いた。

その後送りバントでランナーは進塁。隼人は初めて三塁を踏まれ、一アウトでランナー三塁・二塁となった。

(これは、まずそうだな)

マウンド上の隼人が帽子をとり、アンダーシャツの袖で顔の汗をぬぐっている。表情も序盤に比べて余裕がなくなってきたか。

内野手がマウンドに集まってきた。

総一郎は双眼鏡でマウンドを拡大した。

どうやら内野手は頑張れと声をかけているようだ。

(自分もここから声をかけたいな)

もちろんそんなことはできない。我慢我慢、である。

激励タイムが終わり、隼人が投球を再開した。

フォームは一段と力強く感じた。かなり気合いが入っているように見える。

自分の前では発したことがない彼の雰囲気。

見ているだけの自分の体にも力が入る。

全力で放ったであろう隼人の投球。

対する打者がバットを振る。

金属音が響いた。快音ではない。

力なく上がった打球は、ファールグラウンドで一塁手のミットに収まった。

(もう一人。がんばれ)

総一郎の目から見ても、ボールの緩急はなくなっていた。速球のみ。

さきほどのタイム後より、キャッチャーからサインらしいサインは出なくなった。構えもど真ん中のみだ。そして一球一球、隼人が投げるたびにコクリとうなずいている。

細かい駆け引きはせず、とにかく全力で活きたボールを投げる。そういう方針でこの危機を乗り切るといふことなのだろう。

さすがに打者も球種は読めているはずだが、バットをかすらせるのが精一杯。ボールを前には飛ばせない。

あっという間にツーストライクとなった。

そして。

さらにギヤが上がったのか、投球動作の勢いで隼人の帽子が舞った。

打者のバットが……空を切った。

キャッチャーミットから、この日一番の捕球音がした。

高らかに響く、「ストライク」の声。

バッターアウト。スリーアウトチェンジだ。

「よし!!! ナイスピッチング!!!」

総一郎は拳を握りしめ、思わずそう叫んでしまった。

慌てて口を手で押さえ、コンクリートの手すりに隠れるようにしやがみこむ。

そして頭部だけそーっと手すり上に復帰させ、隼人が他の野手と笑顔でタッチを交わしながら引き上げていく様を見届けた。

結局、試合は1-0で隼人の学校が勝利となった。

総一郎はゲームセット後の整列および挨拶を見届けたあと、しば



らく余韻に浸ったのち、撤収に入ろうとした。

（今日は見に来てよかった）

心底そう思いつつ、双眼鏡をバッグにしまった。

トイレの個室に入って用務員作業服から制服へと着替える必要があるが、日曜日は外階段からの入り口が施錠されているため、いったん降りなければならぬ。

……が。

広い踊り場で振り返ると、いつのまにかそこには、ハーフパンツにTシャツの小さな女の子がいた。

「!?!」

総一郎の心臓が跳ねた。

足音もしていなかったし、気配もまったくなかった。

その女の子は、試合開始前に隼人にタオルを渡していた、マネージャーとおぼしき女の子だ。

双眼鏡で見たときと変わらない、ジト目無表情。

彼女は総一郎を無言で見つめながら、一步、また一步と近づいてきた。

（なぜここに?）

無意識に総一郎は後ずさっていた。

すぐに背中が手すりに当たり、それ以上は下がれなくなった。

あえなく詰まっていく距離。

女の子は、ほぼゼロ距離で総一郎の顔を見上げてきた。

総一郎は気圧され、上体を反らせてしまう。

「やっぱり。用務員さんじゃないね」

「……！」

いきなり変装を見破られて驚く総一郎に対し、女の子はジト目で顔を覗き込み続けた。

やがて一言、ボソッとつぶやいた。

「イケメン」

女の子はそれだけ言うと一歩下がり、ようやくパーソナルスペースから抜けてくれた。

（なんだ？ 何が起きている？）

総一郎は眼鏡を直した……つもりが、コンタクトだったので空振りして右手が宙を泳いだ。

（落ち着け）

行き場の失った右手で一度胸をおさえ、ゆっくりと元に戻した。

この敵は確実に手強い。浮足立ったままでは戦えないと本能的に判断していた。

「君はあっちのマネージャーだな？ 僕になんの用かな」

嫌な予感とともに、そう聞いた。

それは即的中した。

「あんた、こっちが8回にピンチを切り抜けたときに、大きなガッツポーズしてた。で、すぐに隠れた」

総一郎の心臓がふたたびドクンと大きく拍動した。

しっかりと見られてしまっていたのだ。

彼女の右手には、ボールが握られている。

ゲーム開始直後の特大ファールボールを今探しにきて、そのついでにここに寄ったのかもしれない。

ここは野球場から自然に観察できる場所ではない。特大ファールボールが飛んできた時点で、階段に誰かいるというのがこのマネージャーにバレていて、そこからずっとマークされていたのだろう。

「あと、6回にうちのバッター……隼人がヒットを打ったときも、小さくガッツポーズしてた」

「は？」

声が出てしまった。

それは総一郎本人もまったく身に覚えがなかった。無意識に出て

いたか。

「どうして。あんたここの生徒でしょ」

「なぜわかる？」

「最初はカン。でもあんた、今さっき、わたしのことを『あっちのマネージャー』って言った。だからもう確定」

「……」

けっして追及するような厳しい口調ではない。

だが、ジト目に無表情が恐怖だった。

(どうする……)

こんな事態は想定していなかった。

階段は屋上まで伸びておらず、建物側の扉も施錠済み。逃げ場はない。

(正直に答えるしかないか)

変装も一瞬で見破られているし、ごまかせそうな気はしない。

素直に回答を返すことにした。

「僕はその学校の隼人君の友人で、個人的に彼を応援——」

「怪しい」

「何？」

すぐに遮られてしまったうえに、意外な言葉が飛んできた。

「怪しい。本当に友達なの」

「なぜそこを疑う？」

「わたし、隼人を幼稚園のころから知ってる。小学校も中学校も同じ」

「……！！彼の幼馴染で同級生、そしてマネージャー……だと……」

衝撃のあまり、またも心の中の声が口から出てしまっていた。

この女の子、無表情なのでけっして快活な印象があるわけではない。だがこれはまぎれもない。ポジションは『タッチ』でいうところの浅倉南。確定だ。

総一郎はそう思い、いっそう警戒を強めた。

ところが、女の子は変わらぬ表情と声のトーンで、誤りを指摘してきた。

「同級生じゃない。学年は一つ下」

「!？」

後輩だったようだ。

(ということとは)

浅倉南ではなく新田の妹ポジション？ 新田の妹といえば負けヒロイン。ならば脅威とはならないのか？

いや、違う。わかったのは同学年ではないという事実だけだ。

幼馴染の属性は解消されていない。新田の妹ポジションと決めつけるには早すぎる。だいたい、『タッチ』では新田の妹は一つ下ではなく二つ下だったはずだ。

それに、浅倉南と新田の妹のいいとこ取りの可能性もあるのではないか？ 史上最強のスーパーヒロインとなる可能性も否定できないのでは？

(あ)

総一郎は、また脳が不随意に余計な思考を巡らせ始めていたことに気づいた。

理性で抑えつけにかかる。

(どうも最近は脳の暴走が多いな。いけない)

今大事なのは、目の前のマネージャーの属性を確定させることでも、勝手に将来を推定することでもない。

なぜか隼人の友人であるという事実を疑われている。それに対応しなければならぬ。

(疑われている理由が、『わたし、隼人を幼稚園のころから知っている。小学校も中学校も同じ』ということは……)

聞き返せる雰囲気ではないため、今ある材料でやりくりして考えるしかない。

（「本当に友人なのであれば、幼馴染の自分が知らないのはおかしい」という意味かな）

隼人とは、朝の電車が一緒ということで仲良くなった。

だがその電車、一般的な学生が乗るよりも早い時間のものだ。総一郎は生徒会おなじみの朝当番のため、隼人のほうは朝の自主練のため、である。

当然このマネージャーが同じ車両にいたことはない。経緯など知る由もないはず。

（スマホに入っている彼の連絡先を見せられれば楽なのだが。まあダメだな）

それは重大なリスクが潜んでいる。

隼人とこのマネージャーが互いの連絡先を交換していない可能性が0ではないからだ。この様子だとまずありえないと思うが、0でないということが問題となる。

万一このマネージャーが隼人の連絡先を知らず、ここで初めて知ることになった場合、客観的には自分が彼の連絡先を第三者に渡す行為となる。

プライバシー情報は法的保護の対象。自分は個人情報取扱業者ではないので罰則はないものの、違法行為となってしまう。よってその選択肢はない。

（そもそもだ。なぜ隼人君と友人であることを証明しなければなら

ないのだろうか？（謎だ）

信用してくれてもよいのに。総一郎は不思議に思ったが、この女の子は隼人のチームのマネージャー。無視したり無下に扱ったりもまずい。

困る総一郎。

「お？ ヒマリか？ 何やってんだ？」

「――！？」

そしてなぜか、マネージャーの後ろ、階段のほうから隼人の声。ヒマリというのはこのマネージャーの名前か。

当然のことながら、階段を登りきった彼は総一郎も視界に入る。

「あっ！！ 総一郎！！」

彼のサラサラだった短髪は汗と帽子の癖で乱れ、ユニフォームも膝が土で変色している。総一郎にはそれもまた魅力的な姿に見えた。が、この状況である。まずい。

先ほどのマネージャーからの出題である『隼人の友人である証明』は、彼の登場時のセリフをもって成立としてよいのかもしれない。しかし今度は隼人への対応が必要になる。

窮地は続く。

なぜ学校に来ているのか。なぜここにいるのか。なぜこんな格好



をしているのか。

きっとそれを聞かれるのだろう。

瞬時に言い訳の最適解を導くのは不可能だ。

そもそもこのような状況にならないために、あれこれ練っていたのである。すでに作戦は破綻していた。

彼の中での総一郎株は暴落。明日はブラックマンデーになるかもしれない。

(どうする……)

楽器ケースに入る？

プライベートジェットで国外逃亡？

もはやまともな打開策は思い浮かばない。総一郎は死を覚悟した。

しかしー。

「俺のプレー、見に来てくれてたんだな！　ありがと！」

隼人は満面の笑みでそう言って距離を詰めると、総一郎の首に右腕を伸ばしてきた。

きっと肩に手を回したつもりだったのだろう。

ところが有り余る力とガサツな動作で、少し彼よりも背が高い総一郎の首は、やや下向きにロックされる感じになった。

彼はそのまま、総一郎も巻き込んで体を半回転させた。

その後首のロックがゆるめられ、二人でグラウンドを眺める格好

となる。

「おー、ここよく見えるじゃん」

肩には彼の手のひら、背中には彼の腕が乗っている。その感触も心地よい。

数秒経つとそれは外されたが、今度は両肩をがっしり掴まれ、強引に四分の一回転させられた。

向い合わせになる。

「また機会あったら見てくれよな！」

満面の、笑み。

(……)

こっそり観戦していたことを突っ込んでくることもなく。不自然な変装をしていることを訝しんでくることもなく。ただただ、笑顔を向けてくれる。

なんてシンプルで。

なんて眩しいのだろう。

首や肩に感じた粗暴さと大雑把さも。

組みつかれてからほのかに感じていたユニフォームの土の匂いも。とても気持ちよかった。

「本当に友達なの？」

横でふたたび同じセリフを呟いていたマネージャーの声は、もはや総一郎の耳に届くことはなかった。

\* \* \*

総一郎の学校をあとにした隼人は、列を作って歩くチームの後ろのほうにいた。

電車移動だったので、向かう先は最寄りの駅である。

(そういえば、違うとは言われなかったな)

『俺のプレー、見に来てくれてたんだな』

今思えば、総一郎が試合を見ていたのは、ただの自校の応援や、何か他の用事があったたまたま、という可能性もあった。

だが否定されなかったという事は――。

自分のプレーを見るために、彼はわざわざ来てくれたということになる。

(うれしいなあ)

ニヤニヤ。

(眼鏡外した顔も見られたし)

なぜ外していたのかまではわからなかったが、彼の眼鏡なし姿も初めて見ることでできた。それも大きな収穫だった。

「隼人、機嫌がいい」

ボソツと横でつぶやいたのは、マネージャー・日毬<sup>ひまり</sup>である。

「ん、そりゃ勝ったからな」

「怪しい。それだけじゃない気がする」

「……それだけだぞ？」

「本当？」

「本当だぞ？」

ゆるむ口元はとまらない。

疲れているはずの足も、どんどん弾む。

「怪しい」

横でふたたび同じセリフを呟いていたマネージャーの声は、もはや隼人の耳に届くことはなかった。

\* \* \*

その日の夜。

総一郎は日課の勉強を終えると、ベッドの布団の中に入った。

仰向けになると、ちょうど音が鳴った。スマホだ。

(LINEか。お、隼人君だ)

『今日はサンキュー』という彼のメッセージから始まり、メッセージで会話を交わしていく。

(なるほど。マネージャーがボール探しから帰ってくるのが遅かったから、隼人君も探しに来たということなのか。普通はうちの学校の部員が探すものだと思うが、打ったのは彼だったから悪いと思っ  
て志願したのだろうか)

彼が突然あの場所に登場した理由がわかった。

他にも、こちらから試合の細かい感想を伝えたり、学校の敷地に初めて入った感想を聞いたり。

一通りのやりとりが終わると、メッセージは一度止まった。

そろそろ寝る旨のメッセージを送ろうか。

そう思ったときに、彼からこんなメッセージが来た。

『あ、お前けっこう私服ダサイときもあるんだな！ 安心した！』

(……!？ 私服だと思っていた……だと?)

あれはどう見ても用務員の格好だったはず。

そもそも学校なのだから私服で来ることはない。制服でない時点で普通は疑うだろう。さすがに私服説は無理があるのでは？

(ああ、そうか。これも彼なりの気遣いなのだろうな。きっと)

これは気づかないふりだ。総一郎はそう思った。

すべてわかったうえでですっとぼけで、こちらに恥をかかせないようにする気遣い。そういうことなのだろうと思った。

(アスリートというのは自分に厳しく、他人に優しい。素晴らしいな)

総一郎の表情が和らぐ。

今日は想定外のことが多く神経が張っていた時間が長かったが、すっかり気が休まったような感覚がした。

が。

(……これ、どう返事をするのが正解なのだろう?)

『はい、ダサイです』でよいのか？

仰向けでスマホを持った状態でそのまま考えたが、自信の持てる

答えをひねり出すことはできなかった。

やがて寝落ちし、スマホが顔に墜落した。

( 『 霊長類 浅倉南へ』 な話 終 )

時代はI・O・Tだが、I・O・Tはよく見ると泣いている顔に見える話

総一郎は首をかしげた。

学校から帰宅して自室のエアコンをつけたのだが、まったく涼しくならないからである。

自室のエアコンの吹き出し口に手をやった。やはり冷たい空気は出していない。

どうやら死亡したようだ。

(もう古いからな)

ルームエアコンの設計上の標準使用期間は、たいていのメーカーで十年とされている。それは総一郎の知識の中にあった。

このエアコンはもう二十年物。寿命を迎えたとしても不思議ではない。

(壊れるタイミングは不幸中の幸い、か)

三日後、隼人が勉強するためにこの部屋に来る予定である。

今日は金曜日なので、土日が挟まる。

近所の電器屋は即日での工事対応が可能であったはず。今日親に相談すれば間に合うだろう。

(さすがにエアコンがまったく効いていないと暑いな)



暑さには割と強いほうと自覚している総一郎も、少し汗ばんできた。

まだ梅雨明けではないが、今日は晴れていた。西日が当たる部屋はこんなものかということ、いま着たばかりのロングTシャツを脱ごうとした。

(……!)

そこで、総一郎は非常にまずいことをひらめいてしまった。

この部屋で勉強するとき、隼人はいつも学ランを上だけ脱いでいる。

脱いだ中身は、初回はTシャツ一枚だけだったが、二回目からはTシャツの中にピチピチで薄いと思われるインナーを着ていた。

Tシャツの中にインナーというのは、一昔前ではなかなかない発想。

しかし、最近のアンケートで、夏場の男性ファッションで最も嫌われるものが『透け乳首』という結果が出ている。それを防止するために『Tシャツの中にインナー』派は着実に勢力を増してきているらしい。

(彼は月曜日もTシャツの中にインナーを着てくるだろう。そのとき……)

エアコンが故障したままで、灼熱部屋となっていたら？

……彼は、ピチピチのインナー一枚になる可能性が高いのではな  
いか？

その姿はTシャツ姿とはまた違った趣があるだろう。  
見たくないといえば嘘になる。

(いや、何を考えてるんだ。普通にボツだ)

彼は勉強しに来ている。

自分はその勉強に付き合ひ、必要に応じて教えるために傍にいる。  
暑すぎでは勉強にならない。

そのような愚案をひらめく時点で話にならん。純粹に赤点回避お  
よび学力向上を目指す彼にも失礼ー！。

総一郎は拳で自身の頭を一発叩くと、両親にエアコン故障の件を  
報告しにいった。

\* \* \*

月曜日ー！。

隼人を部屋に迎え入れ、円卓を囲んで恒例の二人勉強会が始まっ  
た。

彼は下が学ランに上が白のTシャツ。予想どおりTシャツの中はインナーだ。

ちなみに総一郎は帰宅後に着替え済みのため、グレーのパンツとネイビーのポロシャツという格好である。

隼人が問題を解き始める。

それを確認すると、総一郎はスマホをちゃぶ台の上に置いた。

立ち上がっているのは、エアコン操作アプリ。

(時代はIoT。便利な世の中だ)

IoT。Internet of Things。モノのインターネット。

新しいエアコンは無線LANを搭載しており、流行りのIoTに対応していた。スマホアプリで細かい操作ができるのである。

(もう少し温度を下げたほうがいいかな?)

今現在、総一郎には『普通』という体感温度である。暑くも寒くもない。快適だ。

が、隼人は前に見た練習試合にて、かなり汗をかいているように見えた。

彼は運動選手。代謝が普通の人間よりもよいのだろう。『暑がり』の可能性がある。

総一郎はそう思ってボタンを押そうとする……

と、そこで。

また一つ、案が勝手に降りてきた。

総一郎は暑さが苦手ではない。

そして隼人は総一郎の予想では暑がり。

それはつまり、総一郎は耐えられるが隼人は耐えられない、という黄金の温度帯が存在することになる。

ジワジワ温度を上げていけば、確実にそのゴールデンゾーンに到達できるだろう。そうなれば彼はTシャツを脱いでインナー一枚に――。

(いや、駄目だぞ?)

金曜日に浮かんだ愚案の類似ヴァージョンを、すぐに頭から消去した。

絶対に温度を上げるなよ、と自分に言い聞かせてから、慎重に設定温度を下げるボタンを押した。

しかし。

(ん。少し暑くなってきたな。どうなっている?)

間違いなく設定温度は下げている。それで体感温度が上がってきているのは明らかにおかしい。

総一郎は不思議に思いながらも、再度アプリのボタンを押し、さらに温度を下げてみた。

ところが。

(――!?)

なおも暑くなる。

感じるエアコンからの風も、まったく涼しくない。

総一郎も汗ばむレベルになってきた。

総一郎は隼人のほうを見た。

問題を解いている彼の顔には、粒の大きな汗。

汗腺の鍛えられている運動選手は、成分が水に近くサラサラな汗をかくという。

焦る気持ちとは裏腹に、その爽やかな輝きがとてもまばゆく感じた。

彼がその汗を、いつのまにか首にかけていたスポーツタオルで拭う。

先日見た、練習試合での彼の雄姿が頭に蘇る。

なんと爽やかな――

と思っている場合でない。

総一郎は頭を現実世界に引き戻した。

なぜか愚案を実行するかたちになってしまっている。

どうにかしなければならぬ。

さすがに彼も室温が不自然であるとは思っているはず。

すでに「意図的ではないか」と不信感を抱いている可能性もある。

一刻も早く打開しなければ信頼を失う。

「総一郎」

焦りモードに再度切り替わったところで声をかけられたため、心臓が跳ねる。

「い、いや、隼人君。これは違うんだ。僕は――」

「あれ？ あ、ほんとだ。この答え違うな。ありがと！」

(――!?)

どうやら疑われてはいなかったようだが、事態は悪化する。

隼人がTシャツを脱ぎ始めたのである。

「よっと」

初めて見る黒のインナー一枚の姿。

ピチピチゆえに露になった体のラインは、実に野球部のエースらしいものだった。

締まった肩と二の腕。無駄な脂肪などなさそうだ。

さらに。

二人が円卓を挟んで真正面ではなく斜めに座っているため、なおのことよくわかる……程よく盛り上がり弾力のありそうな、なお

けしからんどころではない。

(こ、これは……眼福……なんて思っている場合ではない)

頭を現実世界に引き戻すと、置いていたスマホを持ち上げ、顔に近づける。

興味よりも、ますます増した焦りが勝った。

(早く温度を下げなければ……あ、しまった、アプリを閉じてしまった……早くもう一度温度設定を……あっ、違う、カメラじゃない。ええと……あっ——)

パシャ。

(○▼※△☆▲※◎★●——!!)

手が震えてカメラのシャッターボタンを誤タッチしてしまった。

しかもそのときスマホは真正面ではなく、無情にも彼の方向を向いていた。

当然、彼は気づいた。

「ん？ いま写真撮ったのか？」

驚いたように総一郎のほうを向き、そう言った。

(あ、僕終わった……)

手にしていたスマホが、ストンと落下した。

続けてエアコン、カーテン、掛け時計、蛍光灯、すべてが落下した気がした。

さすがにこれはリカバリー不可能。

土下座？ 謝罪会見？ 謹慎？ YouTuberに転向？

一通り頭が混乱したのちに、総一郎の頭が髪ごと真っ白になっていく。

しかしー。

彼は驚いた顔をすぐに崩すと、シャーペンを円卓に置いた。

「お前だけズルいぞ！ 俺も撮っていいか？」

疑問形だが、隼人は総一郎の回答を待たず、満面の笑みでスマホを向けてくる。

「あ、手ぶらだとアレだから、コレ持ってきてくれ」

「え？ あ、ああ」

バッグから取り出し渡されたのは、一個の野球ボール。汚れを拭いた跡があった。

「もうちょっと笑ってもらってもいいかー？」

展開に戸惑う総一郎だったが、なんとか笑顔を作る。



パシヤ。

「一回撮ってみたかったんだよなー。サンキュ！ あ、二人一緒のやつも撮ろうぜ」

「え？ え？ ああ、僕は構わないが……」

サッと総一郎の横に移動した隼人は、左腕を総一郎の首に回し。いつのまにか用意していた自撮り棒を前に伸ばした。

「ハイ笑ってー。ボール握って前に出して」

パシヤ。

二人の笑顔がスマホに収まると、隼人は「ありがと！」と総一郎の肩を叩いて元の位置に戻っていった。

そしてまた手元の問題を解き始めた。満足そうにニヤニヤしながら。

（これは……また彼に助けられたのだろうか？）

総一郎は渡されたままの野球ボールを、しばらく両手で包んで転がしていた。

\* \* \*

（なんか今日は部屋がちょっと暑かったな？）

総一郎宅から退出して道を歩きながら、隼人はそう振り返っていた。

途中「総一郎、暑くないのか？」と言おうとしたが、ちょうどそのタイミングで問題の解答ミスを指摘され、そのまま言いそびれてしまった。

隼人は汗っかきなほうではあるが、野球部の練習のおかげで暑さにも汗をかくのも慣れている。

彼の部屋に汗を垂らすのはまずいので念のため一枚脱いだものの、我慢できないほどではなかった。

逆に総一郎のほうは大丈夫だったのだろうか？ と少し心配だった。

（ま、暑けりゃエアコンの温度下げるだろうし。そうしなかったってことは平気ってことか）

彼はいつも涼しい顔をしている。自分と同じくあまり暑さを気にしないタイプなのかもしれない——そう思って、隼人はその問題を考えることを終わりにした。

それよりも、である。

さっき、貴重なものを入手した。

それは汗で失った水分を補って余りあるものだった。  
思い出すと自然と顔が緩む。

勉強している姿をいきなりパシャッと撮られたのには驚いた。

が、それは写真を撮り返すまたとないチャンスのようにも思えた。  
チャンスは逃さず、たたみかけなければならぬ。野球と同じだ。

隼人はスマホを上に掲げ、二枚の写真を表示させた。

「よっしゃー！ 写真ゲットーっ！！」

夜道に響く大声。

すれ違う帰宅途中のサラリーマンが訝しげな視線を送ってくる中、  
隼人は駅へと向かった。

（『時代はIoTだが、IoTはよく見ると泣いている顔に見える  
話』 終）

※注 エアコンは初期不良でした。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~23481](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~23481)

---

だいたいチーバくんのおかげでややこしくなった話  
2020年12月04日 21時20分発行